

下北半島のサル

2002年度（平成14年度）

調査報告書



下北半島のサル調査会

下 北 半 島 の サ ル

2002 年度 (平成 14 年度)

調 査 報 告 書

下北半島のサル調査会

目 次

吹雪の夜、下北のサルは -----ニホンザルの泊まり場考-----	1
2002 年度春季調査結果	4
2002 年度夏季調査結果	10
2002 年 冬季ニホンザル調査報告	25
2002 年度補足調査報告	38
特集 1	
日本国内におけるニホンザル捕獲頭数の推移	40
特集 2	
下北のサル、群れ数と個体数の変遷 (2002 年 12 月末現在)	58

表紙写真

九艘泊集落を見下ろせる岩場で
グルーミングをする A87 群

1990.6.20 脇野沢村九艘泊

撮影：松岡史朗

吹雪の夜、下北のサルは

—ニホンザルの泊まり場考—

伊沢 紘生

ニホンザルの食物が地域ごとに異なることは、今ではよく知られている。その違いを食文化として理解することもできる。一方、サルの泊まり場は、生息する地域の植生や地形や捕食者に合わせ、食物と同様さまざまに異なっているのに、これまでほとんど話題にのぼらなかった。

宮城県の金華山にすむサルは、戦後しばらくまで生け捕りにされていて、人への警戒心はことのほか強かった。私が調査を始めた1960年代には、かれらは島のあちこちにあるモミのパッチ(ある植物が一定の面積に集中して生育しているとき、全体をその植物のパッチという)を泊まり場にすることが多かった。パッチを構成する多くのモミの木は樹齢数百年を越える巨木で、パッチの中は昼でも暗い。とくに冬場、北風が吹き荒び、気温が下がり、雪の降る夜には、かれらはきまってモミ林に泊まった。

それが、人馴れの進んだ今日では、午後から夕方にかけてが干潮で、磯で海藻や貝を採食し終わると、かれらはそのまま磯の、岩や大きな石が積み重なっている、その隙間にもぐり込んで寝てしまう。ブナやケヤキの落果(種子)を日暮れまで拾い食いしていれば、近くにある適当な岩陰に入って寝る。そして、かつて見られた冬場のモミの葉や樹皮食いは、いつの頃からか全く見られなくなった。

石川県の白山山域にすむサルは、加賀藩の時代はあまり狩猟対象にされなかったようだが、それでも、戦中戦後を通してかなり撃たれていたし、野犬が徒党を組んで横行した時期もあった。私が本格的な調査を開始した1970年代には、かれらは日中を谷底の雪崩跡で過ごしたあと、夕方にはきまって急斜面を一気に登り詰め、切り立った崖で泊まるのが常だった。猛吹雪の続く夜は、しばしば雪庇の下にもぐり込んだ。白山のサルのすむ地域には、村人が植林したスギの大きなパッチが点在するが、そこを泊まり場にすることは一度もなかった。

それが、餌づけされ人にすっかり馴れてしまった群れ(カムリA群)は、急斜面を彼方まで登って行こうとはしなくなり、建物の軒下で寝ることまでするようになった。野生群でも、人馴れしてからは、夕方の採食後、そのまま谷底の樹上や岩陰で一夜を明かすことがしばしばである。

下北半島のサルは、金華山や白山のサルに比べ、はるかに狩猟圧の高い歴史を生きてきた。私が調査を始めた1960年代の南西部のサルも、1970年代に調査を始めた北西部のサルも、冬場はきまってヒバのパッチを泊まり場にしていた。

それが、1980年代以降になると、どの群れも人馴れが進み、冬場には、山奥ではなく民家のある下^{しも}の方に出て来ていて、近くにたまたまヒバのパッチがあればそこに泊まるが、そんなことはめったになく、ほとんどの夜を植林されたスギ林で過ごすようになった(松岡史朗氏・私信)。

かつて雪国では、狩猟はもっぱら積雪期に行われていた。樹々がすっかり葉を落として見通しは良く、積雪の白さで獲物の発見がたやすく、カンジキや山スキーを履けば、深い雪に足をとられて行動の鈍る獲物への接近が容易になるからである。野犬がサルを狙うのも、かれらが木伝いでなく、地面(雪上)の移動が多くなる冬場である。

このところずっと、日本の冬は暖冬傾向にあるが、以前ははるかに積雪量が多く、猛烈な吹雪が3日、4日と続くこともまれではなかった。そのようなときは、新雪がうず高く積もるから、サルはまったく動けないし、動かない。気温が零下5℃以下に下がっても、サルは動かなくなる。

このような、かつての雪国の冬、サルは何を基準に泊まり場を選んでいたのであろう。答えは簡単で、サルだけでなくすべての動物についても言えることだが、生き続けることと死なないことである。そして、生きることは食べること、死なないことは外敵に襲われないことと同義である。

金華山のサルがもっぱらモミ林を泊まり場にしていたのは、いざとなったらそこから動かなくても、モミの葉や樹皮を食べ、混在している落葉樹の冬芽や樹皮を食べることで飢えは凌げるし、そこが島じゅうで最も猟師に発見され難い場所であり、万が一見つかってもモミ林伝いに姿をくらすことができるからである。

白山のサルが気温のより低い標高の高い崖を泊まり場にしていたのは、岩場に生える樹木の根元が雪洞のようにになっていることのほかに、根元の回りにはササや灌木やつる植物や草本類やコケが生育し、地面には秋の木の実(種子)が落ちていて、それらを食物にする事ができるし、いざとなったらその木によじ登れば、冬芽や樹皮が食べられるからである。また、そこへは、猟師も野犬も簡単には近づけないからである。雪庇の中を泊まり場にするのも、全く同じことだ。

白山のサルが厳冬期の寒さや雪を避けるためだけなら、標高のずっと低い所にあるスギ林を使う方が良さそうに思える。しかし、スギ林はよりなだらかな斜面や尾根筋にあり、そこへは外敵が簡単に接近できる。また、どの木もきれいに枝打ちされているから、地上から見上げれば、すぐにサルの姿を発見できる。第一、白山のサルにスギの葉や樹皮を食べる習慣がないし、植林したスギ林に落葉樹は混在していないから、そこにじっとしていれば飢え死にが待つだけだ。

下北のサルが泊まり場としてヒバ林をもっぱら使っていたのは、金華山のサルが過去にモミ林を使っていたのと全く同じ理由による。

ところで、ニホンザルにとって針葉樹の葉や樹皮が好物でないことは、これまでに調査された日本の各地で、それらをいずれかの季節に主要食物としているサルのいないことから明らかである。公表されているすべての食物リストからは、どの種類の針葉樹も、その葉や樹皮は、サルにとってはつまみ食い程度のものでしかない。ということは、ほかにかれらの好む食物があれば、無理に食べようとはしない食物だといつてよいだろう。

下北のサルのうち、西南部のサルは、かつては冬場にヒバの葉を大量に食べていた

(吉場, 1959)。西北部のサルは 1970 年代に入ってもまだかなり食べていた(伊沢, 1970・里見, 1971, 1972)。前者は実際に狩猟されていた時代であり、後者は狩猟された重い歴史を背負って生きていた、人をひどく恐れていた時代だから、当然だろう。

下北南西部のサルのうち、1964 年に餌づけされた A 群も、1970 年代初めまでは、九艘泊・貝崎の餌場で、リンゴやコムギやダイズがもらえるのをただじっと待っているあいだ、きっと手持ち無沙汰なのだろう、餌場を覆い隠すように生えるヒバの巨木に、きまって何頭かが登り、ヒバの小枝をたぐり寄せては、枝先の葉を口に入れていた。しかし、餌づけ中止後の A 群や分裂後の A 群由来の群れの観察で、私がかれらのヒバの葉食いを見ていない。

1980 年代以降は積雪が少なく、下北のサルは冬場、色々な食物が簡単に手に入る民家周辺に居続けているわけだから、飢えの心配はない。しかも、そこはもう身の危険もない。満腹した日暮れ、冷たい北風や気温の低下や雪を避けるためだけにはじつに好適な近くのスギ林へと、かれらが向かうのは当たり前だろう。民家周辺にはいたるところに植林されたスギの立派なパッチがある。

一方、民家の周辺には、マツのパッチももちろんある。かれらはスギの葉はまず食べないが、マツの芽や冬に開いて飛ぶマツボックリの種子は食べる。しかし、スギ林に比べずっと透けているマツ林をけっして泊まり場にしないのは、今のかれらが飢えたり餌食になる心配ではなく、贅沢にも(?)寒さや雪を避けることに泊まり場選択の基準を置いているからである。

下北の山からはヒバの巨木の連なりが、下北のサルからは“ヒバ林文化”が消えつつある。

それはそうと、ここまで厳冬期の泊まり場に焦点を合わせて見てきたが、サルの食物という観点に立つと、サルがこれまで口にしなかったものを新しく食べ始めたという確かな記録は、金華山でもあるし(伊沢, 2002)、日本各地にもある。しかし、その逆、今までよく食べていた食物を食べなくなったという記録はどのくらいあるのだろう。このようなネガティブ・データがきちんと記録に残されるのは大変むずかしいことだ。ただ、ニホンザルの食物を食文化という次元も含めて考察する際には、絶対に欠かせない視点であることも確かだろう。

長く継続調査されてきた下北のサルについて、ヒバの葉や樹皮以外にこのような例はないか、丹念に資料をあたってみる必要があるようだ。

引用文献

伊沢敏生(2002) 金華山のサル・新しい食物の開発。宮城県のニホンザル, vol. 13:1-11

伊沢敏生・今井幸七・棚橋篤(1971) 飢えと寒さの中の最北限のサルたち。モンキー, vol. 15(3):6-13

里見信生(1971) 下北のサルの食卓(1)。モンキー, vol. 15(4):30-31

里見信生(1972) 下北のサルの食卓(4)。モンキー, vol. 16(1):16-17

吉場健二(1959) 東北地方の野生ニホンザル調査報告。野猿, vol. 5:15-23

2002 年度春季調査結果

小林 綾

例年なら 4 月末に脇野沢村を訪れる頃には、山はまだ霞がかかったように薄ぼんやりとした緑で、東京から来た私にとってはまるで冬のような感じさえするときがある。それが滞在している間に日々鮮やかに山が変わっていくのを目の当たりにし、ゴールデンウィークが終わる頃にはサクラも咲いて一斉に春が来たようになる。しかし全国的に春が早かった今年には脇野沢村も例に漏れず、着いた頃にはすっかり春模様であった。いつもなら調査終了後となるこの季節にサル達の動きは変わるのか、特に過去 3 年連続して、この時期に 1 週間以上調査をしている O 群を中心に、例年とは動きが違うかもしれない脇野沢周辺のサル達を追った。

《 調査結果 》

＜ O 群 ＞

4 月 28 日 快晴、風僅か。細間沢より穴間・青石・面木の海岸沿いの尾根を調査したが、情報はなかった。しかし松岡氏が 14:50～16:00 武士泊林道の海岸への分岐付近で、西へ移動する群れを観察しており、これが O 群と考えられる。

4 月 29 日 快晴、無風。前日の情報をもとに面木牧場からブナノ沢を上がる。9:27、338 ピーク手前でカン・カンという声を聞き、周囲をしばらく探すがサルの姿は見えぬ。その後、338 ピークから北の尾根沿いに探した。338 北のピーク付近でハナウドとギョウジャニンニクの食痕、さらに武士泊海岸へ向う道に出る手前でイタヤカエデの食痕があったが、武士泊海岸までサルの姿が見えなかったのでひき返した。今度は 338 ピークから海岸沿いの尾根を南下、14:35 滝ノ沢の手前の海岸側の斜面でホウ・ホウという声を聴き、14:50 発見した。群れは採食しながら尾根沿いを南下し、17:30 に 301 ピーク南まで達したところで調査を終了した。この日は最大で 19 頭を数え、他に発信器装着個体のクワと今春生れのアカンボウ 1 頭を確認した。

4 月 30 日 雨、やませが吹く。面木稜線から尾根沿いを北上、8:25 面木北のピークを越えた所で南下してくる群れに出会う。9:30～11:30 頃に面木海岸へ下りる道付近を先頭に群れは停滞、この間最大で 25 頭を数える。その後徐々に海岸側斜面を南下し始め、17:15 青石海岸へ下りる道まで達したところで調査を終了した。この日はクワと識別個体のブナを確認した。

5月1日 晴れ、西風やや強い。7:55 青石の稜線手前で発見、海岸側は風が当たるからか群れは北東へ移動し、300 ピークの南の谷へ向う。しばらく谷の中で停滞した後、15:00 過ぎに 300 ピークの西の鞍部を北側へ越え、海岸沿いの稜線の1つ東側の尾根を北へ下りた。17:45 面木南のピークの南斜面まで達したところで調査を終了した。この日は最大15頭を数え、クワも確認した。

5月2日 快晴、西風あり。8:40 面木林道のブル道との分岐で発見、群れは林道の南北にいて道沿いをゆっくり東へ移動し、13:45 車止め付近で林道の南側にいたサルも北側へ渡った。その後群れは北西に斜面を上がり、301 ピークの西で北に向きを変えて海岸稜線に出て、17:40 滝ノ沢稜線の海岸側斜面を下りていったところを確認して調査を終了した。この日はカウントできなかったが、クワとブナは確認した。

5月3日 晴れ。8:45 滝ノ沢稜線で海岸の方から声を聴いたが、その後気配がなく、稜線を北上してサルを探す。10:33 に 338 ピーク北の稜線上で発見、群れは北上していた。12:40 群れが 338 北ピークの北に伸びる尾根沿いに海岸の方へ向ったので、こちらも道を回って海岸に移動した。13:40 海岸まで100mほどの地点でサルが下りていった尾根から声を聞き、その後採食しながらゆっくり海岸の方へ下りてくる群れを発見した。15:08 から海岸出口付近の沢を北へ渡るサルを数えたが、一部は沢の上流部でも渡っており、両方合わせて38頭(クワを含む)であった。群れは武士泊海岸北の崖の縁に沿って北東に斜面を上がり、16:52 崖の上部で鳴きかわしているのを確認して調査を終了した。

5月4日 雨、朝は生暖かったが、昼間に風が出てぐんと気温が下がる。夕方少し日が差す。前日の最終確認地点から崖の北側の尾根にとりつき、395 ピークを経て少し北まで探す。途中、新しい食痕を幾つか発見するが、サルの声・姿は無かった。これまでもだいたい395 ピーク付近で南へターンしていたので、395 ピーク北の鞍部まで行ってひき返したところ、11:50 尾根の東側からサルの声が出た。鞍部にあったハナウドがかなり食べられていた為、そこで尾根の東側を南下したと思われる。その後武士泊海岸への道との十字路へ向って下っていたところ、12:50 交差する手前でようやく発見した。群れは武士泊林道沿いを南下、18:00 海峡ラインのM字カーブの谷に達して調査を終了した。この日も群れの全容をつかむことは出来なかったが、クワは確認できた。

5月5日 曇り時々雨、風が冷たい。6:57 海峡ラインのM字カーブ南で発見、群れは海峡ラインから武士泊林道まで広がっていて、法面や道路脇で採食をしながら南下していた。8:47 脇野沢川右岸に渡り始め、ゆっくり西へ向った。12:25 群れの先頭は 338 ピークから南へ伸びる尾根上のブル道に達したが、その後も 338 ピークの南西の谷の内側を西へ移動、291 ピークを通過して 17:30 その南西の谷まで達した。この日は脇野沢川を渡る時に 30頭を数え、その際にクワとブナを確認している。

5月6日 晴れ、西風強い。6:47 滝ノ沢林道の間中点付近で群れを発見、ハナウドを採食中であった。サルはゆっくり南下して10:00頃301ピークから東へ伸びる尾根を越えてからは南斜面を西へトラバースし、途中で移動方向を南西にかえた。12:30頃205ピーク北の沢を南へ渡ってその先の斜面で停滞、15:00頃に205ピーク西の鞍部を南に越えて海岸の稜線に出た。16:25~16:35稜線を西へ向うサルを25頭数え、クワとブナの他アカンボウも1頭確認した。17:00面木海岸の方へ下るのを確認して調査を終了した。

【 表1 O群のカウント結果 】

5月3日 15:08~16:05 武士泊海岸への道を北へ渡る時

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	2	9 (クワ・ブナを含む)	1	12
ワカモノ			6	6
5~6才			1	1
3~4才	1		7	8
2才			1	1
1才			5	5
年齢不明			1	1
小計	3	9	25	38
合計				38頭+α

◎ トピック

これまでは調査期間(ゴールデンウィーク)とブナの芽吹きがちょうど重なっていて、ブナのある海岸の稜線から西側斜面の利用頻度が高く、海岸沿いの非常に細長い範囲を南北に行き来していた。その間のブナの若葉への執着は強く、他にカエデ類の花や若葉もよく食べていた。こうして春先はブナばかり食べているように見えていたが、あるとき松岡氏から「サルがブナの若葉に執着する期間はとても短い。芽吹いてからせいぜい10日から2週間ぐらいだ」と聞いてから、自分が観察していたのは偶然そういう期間に当たっていたからなのか、ブナの葉が出揃った後に遊動は変わるのか、という疑問が沸いていた。そして今年は春が早かったおかげで、例年なら調査期間後となる季節のサルの動きを追うことができた。

調査を始めてみるとブナの葉が既に生えそろっていた今回、まさにサル達のブナへの執着が薄れつつある期間だったと思われる。採食していた樹種で最も目撃頻度が高かったのはイタヤカエデで、他に内陸側に入ったことでオヒョウやアオダモ、トチノキの若葉が見られ、ブナの葉も確認はしたものの回数はそれほど多くなかった。遊動のルートも海岸稜線よりも東側を使うことが多く、稜線にいる時も地上で採食していたことのほうが多かったように思う。因みに地上で採食し

ていたものはこれまでと殆ど変わりなく、ハナウド・フキ・ギョウジャニンニクなどが主であった。

もう一つ、例年とは違っていた行動がある。これまでは日に一度、ほぼ必ず海岸近くまで下りていた。海岸で何をしていたかは、人間が下りられないところも多くあまりよく分かってはいないが、少なくとも武士泊海岸では岩についた貝や海岸の縁に生えるマメ科草本を採食していた。しかし、今回は海岸側斜面に行くことが少なく、行っても稜線からそれほど離れないところにいた。採食しているものの違いなのか、或いはこれまでの時期では天候が悪化するとやませ(陸から吹く冷たい風)が続く為にそれを避けていたのか、とにかく今回は海岸側斜面よりも内陸側のほうが圧倒的に利用が多かった。

以上からブナに執着する期間は花や葉が出たての非常に短い期間に限られ、次々に他の樹種が芽を出すに連れて遊動が内陸側へ変わるらしいことが分かった。

< A 2-84 群 >

5月4日 13:30 寄浪の墓地裏で群れを発見。東のほうへゆっくり移動した。16:17 寄浪の神社まで追跡し、調査を終了した。

5月5日 9:30 瀬野の神社向いの斜面にて発見、群れは寄浪から瀬野にかけて東西に伸びる尾根の北斜面をゆっくり西へ移動、15:40 寄浪裏手の尾根上まで達して調査を終了した。

◎確認個体 オトナメス；ゴマ(発信器装着個体)

今春生れのアカンボウ(オス)のいるオトナメス

< A 2-85 群 >

5月4日 16:30 田ノ頭沢生コン工場の北斜面で発見、近くにいた野猿監視員の方の話では、今日はガソリンスタンド南東の神社より北上してきたとのこと。群れはそのまま尾根を北上し、18:20 に 125 ピークやや南まで達して調査を終了した。

5月5日 6:10 館超橋付近で国道を西へ渡るの発見。群れは国道沿いを北上し、10:45 滝山橋付近で国道を東へ渡った際に 49 頭(昨春生れの 1 才 12 頭を含む)を数えた。その後、下滝山林道の方へ向ったが、調査員は 12:30 カウント終了と共に調査を終えた。

◎確認個体 オトナオス；ゴンズイ・カマス

オトナメス；アカネ・アンズ・ナス・コナス・カズラ・ハギ・ムギ・
ウルシ・タチフジ
今春生れのアカンボウは確認できなかった。

< A-87 群 >

5月1日 8:36~8:53 九艘泊小学校裏の法面にて採食中のサルを発見、11頭(今
春生れ1頭を含む)を確認した。

< 海峡ライン以北 >

5月1日 7:50 海峡ラインM字カーブ北で新しいサル糞を2個発見。その後8:30
~11:50 大荒川林道、12:00~17:00 長右エ門林道を踏査するが、情報はなかった。

< 男川 >

5月1日 11:40~17:15 男川流域を踏査したが、情報はなかった。

< 食べていた物 >

アザミの茎・ハナウドの茎・ヨブスマソウ類の根に近い茎・オニグルミの花・ク
ロモジの花・ツルアジサイの新芽・イタヤカエデの若葉と花・クローバー・タン
ポポ・フキ(フキノトウを含む)の茎・ブナの葉・オヒョウの葉・アオダモの花と
葉・ギョウジャニンニクの茎・トチノキの葉・サワグルミの葉柄の髄・ミツバア
ケビの新条

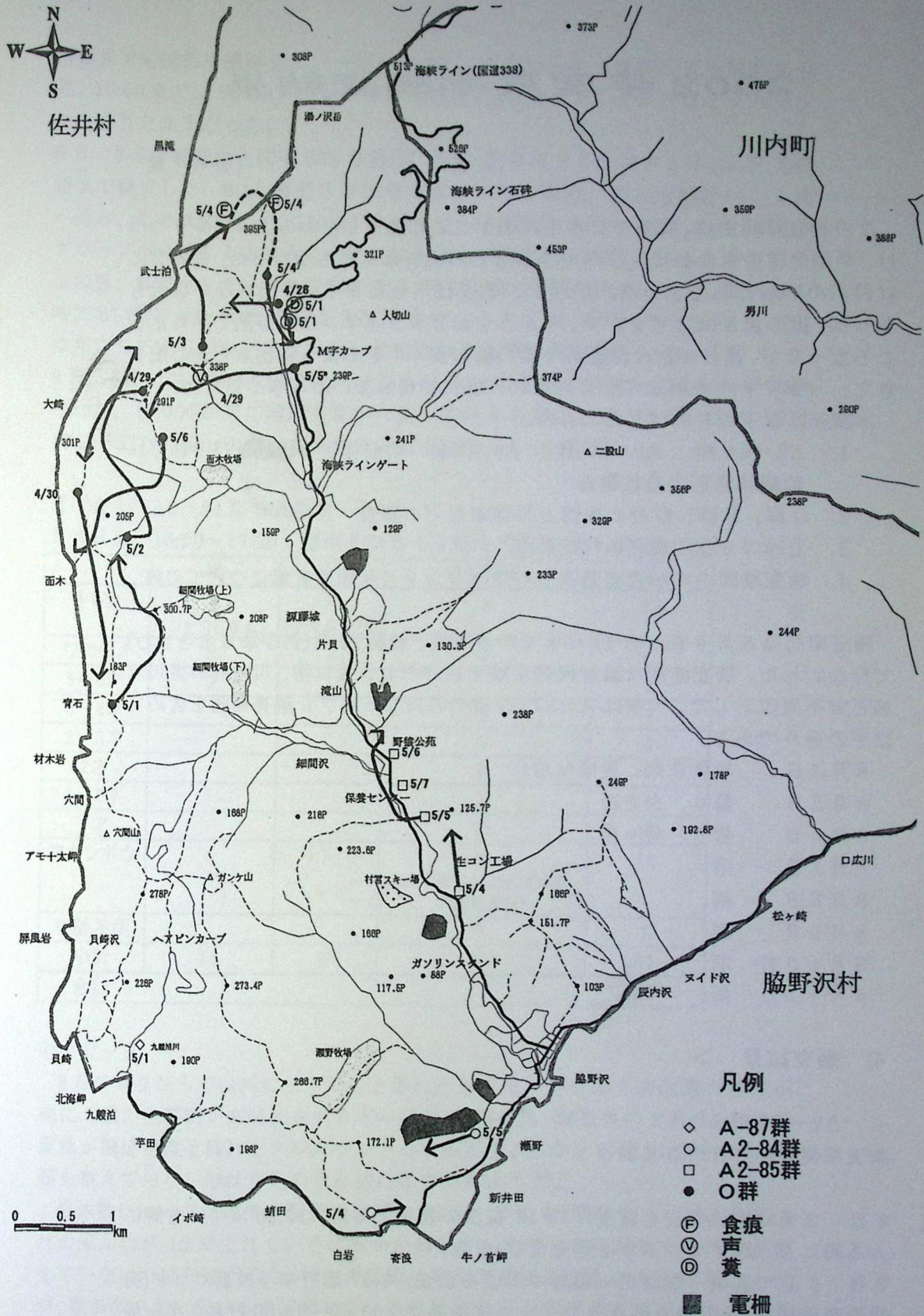


図1 2002年春季ニホンザル調査結果(脇野沢村)

2002 年度夏季調査結果

小林 綾

この調査期間中は、まるで日本中の雨がここに集中したかのように降りつづき、早朝や夜中も合わせれば雨の降らなかった日は1日もなかった。最終日には村内のあちこちで土砂崩れが起り、林道は川となって調査出来ない場所もあった。山の実はまずまずで、ちょうどエビガライチゴなどが熟し始めたところだったが、連日の雨の影響が今後の秋の実にどのように出るのか心配された。一方、サルに関してはそれぞれの群れで興味深い出来事があった。

本調査は以下の目的で行なわれた。

1. A2-84 群、A2-85 群、A-87 群、の個体数・構成及びそれぞれの個体識別の継続調査
2. O 群、B 群、U 群の確認と個体数などの調査
3. 上述の6群の周囲の状況調査
4. 調査期間中の調査範囲内でのタイワンザル情報の有無についての確認

調査期間は8月6日から11日までの6日間、総勢25名(初参加6名を含む)で行なわれた。調査範囲は脇野沢村全域と佐井村の長後以南、川内町の男川流域と野平周辺とした。天候はA-87・O群のみ行なったプレ調査期間を含めて以下の通りである。

8月4日	早朝雷雨、昼間は晴れ
8月5日	曇り、夕方雨
8月6日	曇り、時々雨
8月7日	雨
8月8日	雨
8月9日	雨
8月10日	雨
8月11日	雨

《 調査結果 》

< A2-84 群 >

調査期間：6~8日の3日間

6日 2名で寄浪周辺を調査。13:45 寄浪の墓地で発見、16:00 頃牛ノ首岬に入る時に28頭(アカンボウ2頭を含む)を数えた。

7日 6名で寄浪・新井田・瀬野の周辺を調査。7:07 瀬野中学校裏でゴマ(発信器装着個体)を含む6頭以上のグループを発見、11:40~14:30 村営スキー場

南西まで断続的に追跡した。一方、15:38に寄浪から牛ノ首岬へ入る群れを発見、16:00までに60頭(アカンボウ6頭を含む)を数えた。この日は2グループに分かれたままだった。

8日 3名で瀬野から国道338号線(以下、国道)のガソリンスタンド(以下、GS)西まで調査した。8:11瀬野中学校南の林でサルを発見、群れは瀬野川を上流へ進み、その後北上した。13:30頃、88ピーク付近でゴマを確認、この頃に2グループが合流したと考えられる。群れは15:00にGS西の伐開地まで達した。この後、車でパトロール中の調査員がGS付近の国道でサルを発見、東へ渡る時に87頭(アカンボウ12頭を含む)をカウントしたが、アカンボウのうち1頭は死亡しているのか、母ザルらしき個体が引きずって歩いていた。

9日 5名でカウントのみ行なった。6:41本村の北端の民家付近で群れが確認された。15:00GS南で国道を東から西へ横断する際に82~83頭(アカンボウ13頭を含む、但し1歳が含まれている可能性あり)を数えた。

【 表1 A2-84群の個体数 】

8月8日 16:50~17:20 国道338のGS南を西から東へ横断する時

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	8 (シャチを含む)	23 (ゴマを含む)	1	32
ワカモノ	4	3	4	11
5~6才	2			2
3~4才			3	3
2~3才			4	4
2才			6	6
1~2才			1	1
1才			15	15
アカンボウ			12 (内1頭は死亡している 可能性有り)	12
年齢不明			1	1
小計	14	26	47	87
合計				87

◎トピック

8日のカウントでは死亡していると思われるアカンボウが1頭確認されたが、他に1歳の性不明が右後肢を引きずって歩いていた。調査後の8月14日に松岡氏が国道を渡る群れをフルカウントした際には、アカンボウ11頭を含む88頭を数えており、やはり先の赤ん坊は死亡したようだ。

個体数については昨年の調査では夏に84頭、冬に83頭数えていて、今春生れの赤ん坊が12頭生れているにもかかわらず、今年も80頭台でそれほど増えていないのはなぜだろうか。この問題は昨年の報告書でも取り上げたことだが、数が多い上に広がって行動しているためになかなか正確なカウントが出来

ていない。しかし今年の結果を見ても、1～3才の子供の数が少ない(表2)。このうち1999・2000年は冬の調査でも同様の数が得られていることから、何かあったとすれば0才の冬の調査時以降となる。また2001年は冬季調査のカウント時の視界が悪く、アカンボウが11頭しか数えられていないが、少なくとも冬までに1頭のアカンボウの死亡が確認されている。

【 表2 A2-84群の現1～3才の生れた時の数 】

生れ年	頭数
1999年(現3才)	8
2000年(現2才)	12
2001年(現1才)	19

しかし年齢が分かっているA2-85群やA-87群では、3才までの同年齢の数は減っても1頭程度、大方はそのままの数で年齢を重ねていっている。となると、この現象は何故起るのか。この付近で最も大きい群れであるにもかかわらず、今だに遊動域が広がったり分裂したりしない理由はこのあたりにあるのかもしれない。

また今回は僅か1日とはいえ、ゴマを含む6頭以上のグループの分派行動が見られた。合流した後、ゴマが他個体からかなり攻撃され、またゴマ自身、いつもは群れの中心部にいるのだが、この時は周辺で観察された。これまで調査中にこの群れでの分派が見られたのは初めてだが、少数グループの方にゴマがいた為に分派がはっきりと分かった。これがゆくゆく分裂へとつながるのか、その際にゴマがどんな動きをするのか、今後の動向に注意したい。

< A2-85群 >

調査期間：6・11日

6日 A2-84群と掛け持ちの2名で村営スキー場から田ノ頭沢付近を調査した。9:10村営スキー場東で群れを発見し、東へ移動するのを追跡した。11:40田ノ頭林道の生コン工場付近で南へ渡る際に51頭(アカンボウ4頭を含む)をカウントした。群れはメゴ田ノ頭沢まで達し、12:10まで観察した。

8日 踏査しなかったが、7:30鱈の里バンガロー裏を北上し10:00頃片貝橋付近で目撃されている。

10日 踏査しなかったが、8:15源藤城集落と面木林道入口の中間付近の国道西側で約10頭、17:13源藤城集落の東のスギ植林地から電柵の畑にかけて約10頭が目撃されている。

11日 5名で源藤城から野猿公苑のテニスコートまで調査した。8:30源藤城の国道東斜面にて発見、群れは南下していた。その後豪雨の為に一旦調査を打ち切ったが、12:25野猿公苑裏のテニスコートで再び発見し、28頭(アカンボ

ウ 4 頭を含む)を数えた。その後群れは北上していき、14:30 調査を終了した。

【 表 3 A2-85 群の個体数 】

8 月 6 日 11:40~12:10 生コン工場近くの田ノ頭林道を北から南へ渡る時

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	2 (ゴンズイ・カマス)	15 (ナス・コナス・ムギ・ アカネ・アンズ・コムギ・ カズラを含む)		17
ワカモノ		3	1	4
5~6才	2			2
4~5才	1			1
3~4才	1	1		2
3才	1			1
2~3才	1	1	1	3
2才	2	2	1	5
1~2才	1	1		2
1才	1	3	6	10
アカンボウ			4	4
小計	12	26	13	51
合計				51

◎トピック

今回は追跡日数は短かったが、遊動域には特に変化は見られなかった。遊動が鱒の里より北側に限られたのは、A2-84 群が 9 日まで GS 付近にいたからかもしれない。個体数も昨年とほぼ同じだが、コドモの数は変わらずアカンボウの数も少ないことから、オスの移出分と思われる。

識別個体、特にオトナやワカモノメスでいなくなったサルはいないと思われるが、この調査中に全個体の確認はできなかった。またコナスの子で 97 年生まれのナスビが初産年齢に達したが、ナスビ自身が確認されていない為、出産したかどうかは分からなかった。これも含めて全てのアカンボウの性別や母親の名前の確認は出来なかった。その他にはナスが右後肢を負傷し跛行していた。

< A-87 群 >

調査期間：4~9 日(個別のデータ収集の為)

調査範囲は九艘泊周辺からガンケ山にかけて

4 日 九艘泊の新設道路付近から北上して、ヘアピンカーブ北の伐開地を通って、ガンケ山から西に伸びる尾根まで達した。

5 日 ヘアピンカーブ北の伐開地付近から北上し、中細間で向きをかえて南下

し、ガンケ山に達した。

6日 この日の朝、ガンケ山の南付近でコゴミ（発信器装着個体）を含む14頭と α オスのハッカクを含む10頭の2グループに分かれたらしい。コゴミグループはガンケ山南付近に、ハッカクグループは九艘泊の新設道路のヘアピンカーブ付近からその北の伐開地西側を移動し、そこから南下して猿橋付近に達した。

7日 3名で調査。朝、ハッカクグループは猿橋北に、コゴミグループが九艘泊新設道路の車止め付近にいた。13:00頃車止め付近で両グループは合流し、九艘泊川周辺を移動した。

8日 ヘアピンカーブ西から北上し、北の伐開地を経て中細間まで達して折り返し、ガンケ山付近を通過して南下した。

9日 新設道路沿いを南西に移動、小学校付近で西に折れ、貝崎の方へ向った。

【 表3 A-87群の個体数 】

全個体が識別されている為、カウントはその都度行なわれた。

	♂	♀	小計
オトナ	5 (ハッカク・ホホッチ・アニキを含む)	3 (クルミ・ワラビ・アケビ)	8
ワカモノ		4 (コクワ・シドケ・クルミン・コゴミ)	4
4才	1 (クルミの子)	2 (チェリー・アケビの子)	3
3才 (括弧内は母親の名前)	2 (クルミ・ワラビ)		2
2才 (括弧内は母親の名前)	2 (ワラビ・サクラ)	1 (アケビ)	3
1才 (括弧内は母親の名前)	2 (コゴミ・アケビ)	1 (コクワ)	3
アカンボウ (括弧内は母親の名前)		1 (クルミ)	1
小計	12	12	24
合計			24

◎トピック

調査員の中山氏と堀内氏が自身の研究の為にずっと追跡しているので、詳細がかなりよく分かっている群れである。個体数・遊動域に変化は無く、これまでのメンバーにオトナ♂1頭とクルミのアカンボウが加わった。ほぼ1日に1度は、九艘泊新設道路の上下のヘアピンカーブ周辺と九艘泊川上流部の伐開地にて採食をしていた。

この群れでの分派の観察例は数年前に続いて2例目である。主なる3頭の

オスのうち、10頭の方に α オス(ハッカク)、14頭の方に残り2頭のオスが入っていた。グループが合流した時、コゴミグループにいた2頭のうちの1頭が片手を痛めていたので、 α オスがいない間に2頭のオスの間に何かトラブルがあったのではないかと考えられた。以下、分派していた時の各々のメンバーである。

グループ1

オトナオス；ハッカク・アニキ

オトナメス；アケビ・コクワ・チェリー・シドケ(ワラビの子)

その他；アケビの子(4才♀・2才♀・1才♂)・コクワの子(1才♀)

計 10 頭

グループ2

オトナオス；名前なし2頭・ホホッチ

オトナメス；クルミ・クルミン(クルミの子)・

ワラビ・コゴミ(ワラビの子)・

その他；クルミの子(4才♂・3才♂・0才♀)・ワラビの子(3才♂

・2才♂)・コゴミの子(1才♂)・故サクラの子(2才♂)

計 14 頭

通常、群れが分派・分裂する際は親子関係が強く作用すると言われる。このグループを大雑把にまとめると、グループ1はハッカクとアケビ一家、グループ2はその他のオトナオスとクルミ一家、ワラビ一家となる。但しシドケは例外で、ワラビの子であるがグループ1に入っている。

さて、この分かれ方を深読みすると、昨年春に死んだサクラと多いに関係があるように思える。両グループに分かれたワラビとアケビは共にサクラの子(各々長女、次女)で、その下にコクワ(3女)、チェリー(4女)と2才の♂が続く。このサクラ一家は、A-87群の中心的な一家であった。一方のクルミはこの群れの初期からのメンバーではあるが、オスの子ばかりが続くせいか、どうも脇役的な存在が続いている。

そのサクラの死から1年、分派とはいえ、それぞれ数頭の子供がいたワラビ一家とアケビ一家に分かれたのは非常に面白い。来年はチェリーも初産年齢を迎え、サクラの娘達はますます賑やかになりそうだ。今後もこの小さな群れで分派があるのか、その際にどのようなグループになるのか、全ての個体が識別されているだけにとっても興味深いところである。

また1日とはいえ、ほぼ同時期にこの付近で最大の群れであるA2-84群(7~8日)と最小のA-87群(6~7日)が分派したのは何か理由があるのだろうか。A2-84群の方は以前より頭数の増加から分裂が注目されてきたが、A-87群の方は小さな群れである。遊動域も小さく、特に九艘泊周辺はA2-84群と共有している。両者に共通していることはどちらの群れも北と東が2つの群れによってふたをされている状態であるということだ。

今後もこの小さな群れの動向を注目したい。

< O群 >

調査期間；4～11日(予備調査も含む)

4日 1名で海峡ライン・面木林道・細間林道周辺を調査した。8:25 源藤城林道入口付近の国道を南西へ渡る群れを発見、30頭(アカンボウ2頭、発信器装着個体クワ、識別個体ブナを含む)を数えたが、渡ってすぐに見失った。その後、面木林道・細間林道周辺を探索したが、15:35 上の細間牧場南の谷でサル声を聞き、鳴きかわしは16:15まで続いた。声のした辺りで探したが見つからず、18:15 調査を終了した。

5日 2名で青石林道・穴間林道・細間林道・下細間林道周辺を調査した。10:03 青石林道のイタヤ沢東で発見、群れの殆どは既に林道を南へ渡っていた。12:00 頃群れは細間林道の穴間林道分岐やや東を南東へ渡り、更に南下した。14:20 下細間沢の上流部で一旦停滞したが、15:00 頃群れは更に東へ移動して16:00 頃216ピークの北側まで達した。16:30 群れが216ピークの西の谷へ向った後見失い、17:30 調査を終了した。

6日 2名で下細間林道から面木牧場まで調査した。7:20 下細間林道終点で発見、群れは北上している様子だったが、7:52 細間林道の南で群れを見失った。8:55 細間牧場のゲート東から声がして群れを発見、下の細間牧場東を北上、上の牧場を北西に抜けた。15:01 面木林道車止め付近で林道を北へ渡り更に北東へ移動、17:00 面木牧場西のブナオ沢まで達し、移動距離は約4.5kmとなった。この日は最大で17頭を数えた。

7日 2名で海峡ラインから武士泊海岸にかけて調査、カウント時に更に3名加わった。6:36 海峡ラインのM字カーブ南で発見、群れは海峡ライン沿いを採食しながら北上した。このときのグループはクワを含む30頭ほどで、8:40 頃にはM字カーブに南端を武士泊林道の方へ下っていった。ところが8:55 頃、ブナを含む14頭がM字カーブから南で海峡ラインへ上がってきて前のグループの後を追った。9:35 より武士泊林道でカウントを開始したがこのときは23頭しか数えられず、その後群れを見失った。11:14 八家戸沢左岸で再び発見、群れは海岸の方へ移動していた。13:49 から武士泊海岸で海岸を南下するサルを観察、この時に41頭を数え16:10 調査を終了した。

8日 3名で面木牧場から東、源藤城林道まで調査した。7:50 面木牧場の南西の伐開地で発見、群れは伐開地とその北の滝ノ沢林道周辺をうろうろした後、10:00 頃から面木牧場の西から北を経て牧場北東の伐開地で暫く停滞、更に東へ移動した。15:48～15:56 源藤城林道入口付近で国道を東へ渡ったが、この時49頭(アカンボウ5頭とクワを含む)を数えた。群れは源藤城林道沿いを東へ向い、129ピークで南下、18:00 まで129ピーク南で声を確認し調査を終了した。

9日 午前4名に午後から3名を加え、計7名で源藤城林道・細間牧場・細間林道周辺を調査した。7:30、129ピーク南東の谷から声を聴いたが、その後声がしなくなった。周辺をしばらく探索した後、10:15 方探によって群れが源

藤城北部の電柵の畑付近にいたことが分かった。11:17～11:39 その電柵付近で国道を西に渡り、このとき 42 頭(アカンボウ 4 頭とクワを含む)を数えた。その後脇野沢川の右岸に渡ったところまで確認して見失ったが、方探によって細間牧場の方に向っていると思われた。14:37 下の細間牧場北西の伐開地でサルを発見、群れは牧場の西を経て南下し、青石林道の分岐と穴間林道の分岐付近の 2ヶ所に分かれて南へ渡った。18:00 頃、細間・穴間林道分岐南の谷で声を確認し調査を終了した。

10 日 5 名で下細間林道・細間林道・細間牧場周辺を調査した。7:30 下細間沢上流部で群れを発見、沢の右岸を沢に沿って下り、13:50～14:40 細間林道・下細間林道分岐の東で細間林道を北へ渡った。その後、群れは北西に向かって下の細間牧場に出て、牧場の縁を北へそして管理小屋付近で西へ移動した。このとき牧場内の道を渡るサルを 45 頭(アカンボウ 5 頭とクワを含む)を数えた。16:00 頃、上下細間牧場を結ぶ道から南側を尾根伝いに西へ向うサルを確認したが、その後下の細間牧場の西側の尾根を探した際には、サルの糞を 1 つ発見し、方探でもイタヤ沢の奥付近で反応があった為、群れがその周辺まで達したと考え 18:00 調査を終了した。

11 日 午前 4 名、午後 4 名の延べ 8 名で細間林道・面木林道・穴間の新設道路・海峡ラインの M 字カーブ付近まで調査した。午前中は方探をしながら面木林道から 300 西ピークまで行ったが電波は入らず、青石林道へ下りるパーティと面木林道に戻って車で海峡ラインや穴間の新設道路を探すパーティに分かれて探した。しかしサル情報はなく受信も僅かで、さらに大雨と増水のため、一旦調査を中断した。雨がやや弱くなった 14:00 頃から再び調査を開始し、細間牧場で受信できたので周辺を探したところ、16:04 下の細間牧場入口で群れを発見した。その後、上の牧場に至る道周辺に展開、採食しているのを確認して 17:10 調査を終了した。この日は最大で 21 頭(アカンボウ 3 頭とクワを含む)を数えた。

【 表4 O群の個体数 】

8月8日 15:48~15:56 源藤城林道入口の国道を西から東へ渡る時

	♂	♀	性不明	小計
オトナ	5	13 (クワを含む)		18
ワカモノ	3	5	3	11
4~5才			1	1
3~4才		1	1	2
2才			2	2
1~2才			2	2
1才			3	3
1~4才			5	5
アカンボウ			5	5
小計	8	19	22	49
合計				49頭+ α

◎トピック

ここ数年の早朝から夕方遅くまでの調査により、この群れの夏の移動は早朝と夕刻の涼しい時間帯にかなりの距離を動くことが分かってきていた。しかし今回のように最終の11日を除いて7日間ともほぼ2kmは移動し、最大で4km強も動いたことを記録できたのは貴重であった。また、ブナらしい個体を含む10数頭のグループが群れから少し遅れがちで、やや分派に近い行動をしているときもあり、時には先頭から2時間ほど遅れて同じ場所を通過することもあった。幸い、発信器個体のクワは先の大集団のほうにいたことが多かったので、群れの最後を追っていても、方探によって群れの先頭を掴むことが出来た。このことからO群の遊動域内で僅かな時間の差で数キロ離れて群れが見つかった場合に、2群なのかそれともO群の先頭と最後なのかをきちんと見極める必要が出てきた。かつて何度かそのようなことがあり、その度に議論になったが、今回の一件で同じ群れである可能性が強くなった。

また、これまで追いきれていなかった細間林道南の地域(下細間沢周辺)の利用状況が垣間見えた。細間林道の南側に渡ることは過去に何度かあったが、たいていは少し入ってすぐに戻ってきていたので、下細間沢の上流部から東の地域を使うようになったのはおそらく最近と思われる。何故ならこの辺りのブル道はここ数年で出来たもののようで、特にエビガライチゴが多くサル達もそれを目当てに来ていた。これまで夏の調査中によくイチゴを食べていた300ピーク周辺とその北側のブル道は、放置されたままになっているせいか低木が伸びてきて、日当たりのよいところを好むエビガライチゴとしてはあまりいい環境ではなくなってきている。それを反映してかこの調査中、O群は一度もそこへ寄りなかった。今後、夏の調査はこの下細間沢周辺のイチゴが大きなポイントと

なることが予想される。

個体数についてはフルカウントは出来なかったが、昨年と規模はほぼ同じと
考えて良さそうだ。

< B・U群 >

調査期間；8～11日

8日 2パーティ4名で大荒川・長右エ門両林道と牛滝周辺の国道を調査した。サル情報として長右エ門林道では縫道石南と薪山鞍部に古いフンがそれぞれ2個と1個見つかった。

9日 2パーティ4名で大荒川・長右エ門両林道と牛滝周辺の国道を調査したが、サル情報はなかった。

10日 2パーティ4名で大荒川・長右エ門両林道と牛滝周辺の国道と揚ノ沢・石山沢を調査した。サル情報として大荒川林道では403ピーク東で古いススキの食痕、403・385ピーク間の小ピークの北東の谷で食害により変化したらしいタカノツメの木、焼山東でススキの食痕、牛滝沢・揚ノ沢出合いの国道上にエゾニュウの食痕があった。

11日 2パーティ4名で大荒川・長右エ門両林道、牛滝周辺の国道、野平を調査したが、サル情報は無かった。

◎トピック

懸案のB群U群の行方については今回も掴めぬままであった。更に4日連続で大荒川・長右エ門両林道、牛滝周辺の国道を中心に痕跡を探したにもかかわらず、新しい情報が全くないということはこの地域はサル達にあまり重要視されていないのだろうか。この2群と次に報告するZ2群との関係がこれからの大きな課題となるであろう。

< Z2a群 >

調査期間；10日

U群の北に位置するZ2群が最近、Z2aとZ2bの2群に分裂したため、U群との位置関係も探るべく、3名で海峡ライン沿いの牛滝・福浦・長後・野平を調査した。牛滝から福浦までの道には点々とフンがあり、牛滝周辺では数日前のフンもあった。長後では最大22頭(内アカンボウ7頭と黄色い首輪の発信器をつけたオトナメスを含む)のZ2a群を発見、群れは南下していた。

< 男川流域 >

調査期間：8・10・11日

8日 2パーティ4名で滑川・板家戸沢・弥五左衛門沢・西大家戸沢・荒川越沢・小川平沢・松山沢を調査した。東大家戸沢は雨による増水のため入ることが出来なかった。どの沢もサル情報はなく、小川平沢下流部のヤマグワにも食痕はなかった。

10日 2パーティ4名で滑川・栃ノ木沢・兵五郎沢・板家戸沢・弥五左衛門沢・西大家戸沢・東大家戸沢・松山沢を調査した。ハナレザルは確認したが(後述)、群れの情報は無い。

11日 2名で男川本流と板家戸沢を調査したが、サル情報はなかった。

< 口広川・小沢周辺 >

調査期間；9・10日

9日 2名で口広川・深石沢・小沢を調査した。口広川上流にエゾニューウの食痕が2ヶ所あったが、それ以外は痕跡はなく、どの沢にもヤマグワの食痕は見られなかった。

10日 3名で口広川と権左エ門沢林道周辺を調査したが、サル情報はなかった。

< 蛸崎越沢 >

調査期間；11日

11日 2名で蛸崎越沢を調査したが、増水のために水源池公園の先までしか行けなかった。ひき返した後に海峡ラインを10:15～11:15に長右エ門林道入り口まで、12:20～13:30に湯ノ沢岳入口まで車でパトロールしたがサル情報はなかった。

< ハナレザル情報 >

8日 脇野沢村のガソリンスタンド北にワカモノオス1頭。

9日 夕刻、脇野沢本村の八幡宮にてオトナオス1頭。

10日 13:37 弥五左エ門沢林道入口の男川対岸にてオトナ性不明が北西方向に移動。

< タイワンザル情報 >

調査期間中に、調査範囲内でのタイワンザルの情報はなかった。

< 食べていたもの >

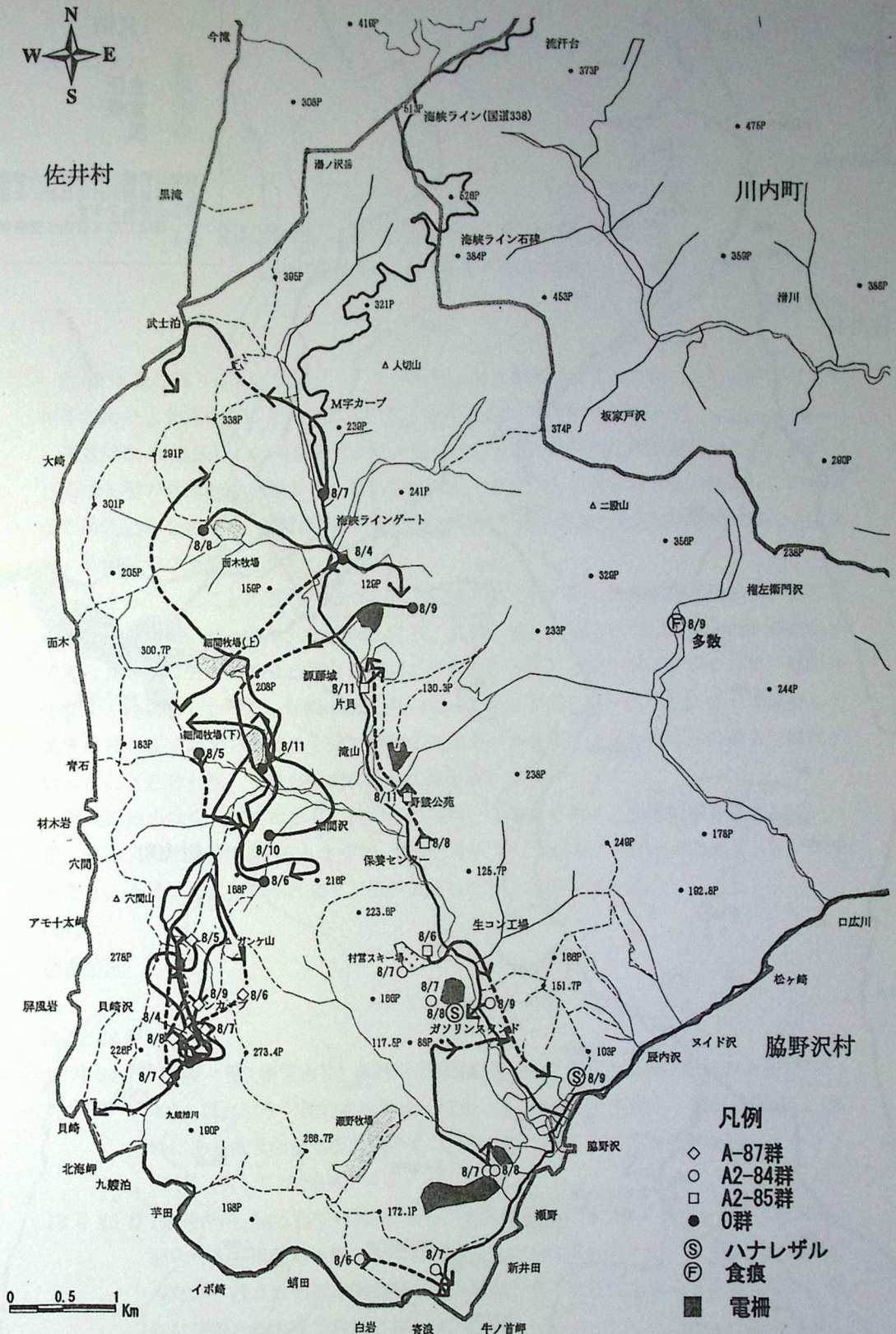
◎自然のもの

ニガキ(実)・エビガライチゴ(実)・ヤマザクラ(実)・ナワシロイチゴ(実)・
ウワミズザクラ(実)・ノブドウ(実)・クロモジ(実)・オオカメノキ(実)・
ガマズミ(実)・クマヤナギ(実)・ハマナス(実)・ブナ(実)・ツルマメ(実)・
マツ(球果)・オニグルミ(果肉)・マルバマンサク(種子)・ツノハシバミ(種
子)・アオダモ(種子)・ヤブジラミ(種子)・アザミ ssp. (種子と葉)・イネ sp.
(種子と葉)・クズ(花と葉)・ヤマブドウ(葉)・スゲ ssp.(葉)・イタチハギ(葉)・
ヤマハギ(葉)・シロツメクサ(葉)・クワ(若い葉)・サルナシ(葉)・カラマツ
(若い葉)・ミズヒキ(花)・エゾニュウ(茎)・ススキ ssp.(茎)・サルトリイバ
ラ(新条)・ミヤマタタビ(虫えい)・キノコ sp.・セミ・イナゴ・アブ・イ
モムシのようなもの

◎畑のもの

カボチャ・アズキ・プラム

2002 年度夏季ニホンザル調査は、京都大学霊長類研究所野外観察施設から調
査費の一部を援助していただきました。



- 凡例
- ◇ A-87群
 - A2-84群
 - A2-85群
 - O群
 - Ⓢ ハナレザル
 - ⓕ 食痕
 - 電柵

実線は目視による群れの移動、
点線は目視以外の情報による
群れの移動を示す。
フン情報での×数値は個数を
表す。

図1 2002年夏季ニホンザル調査結果(脇野沢村)

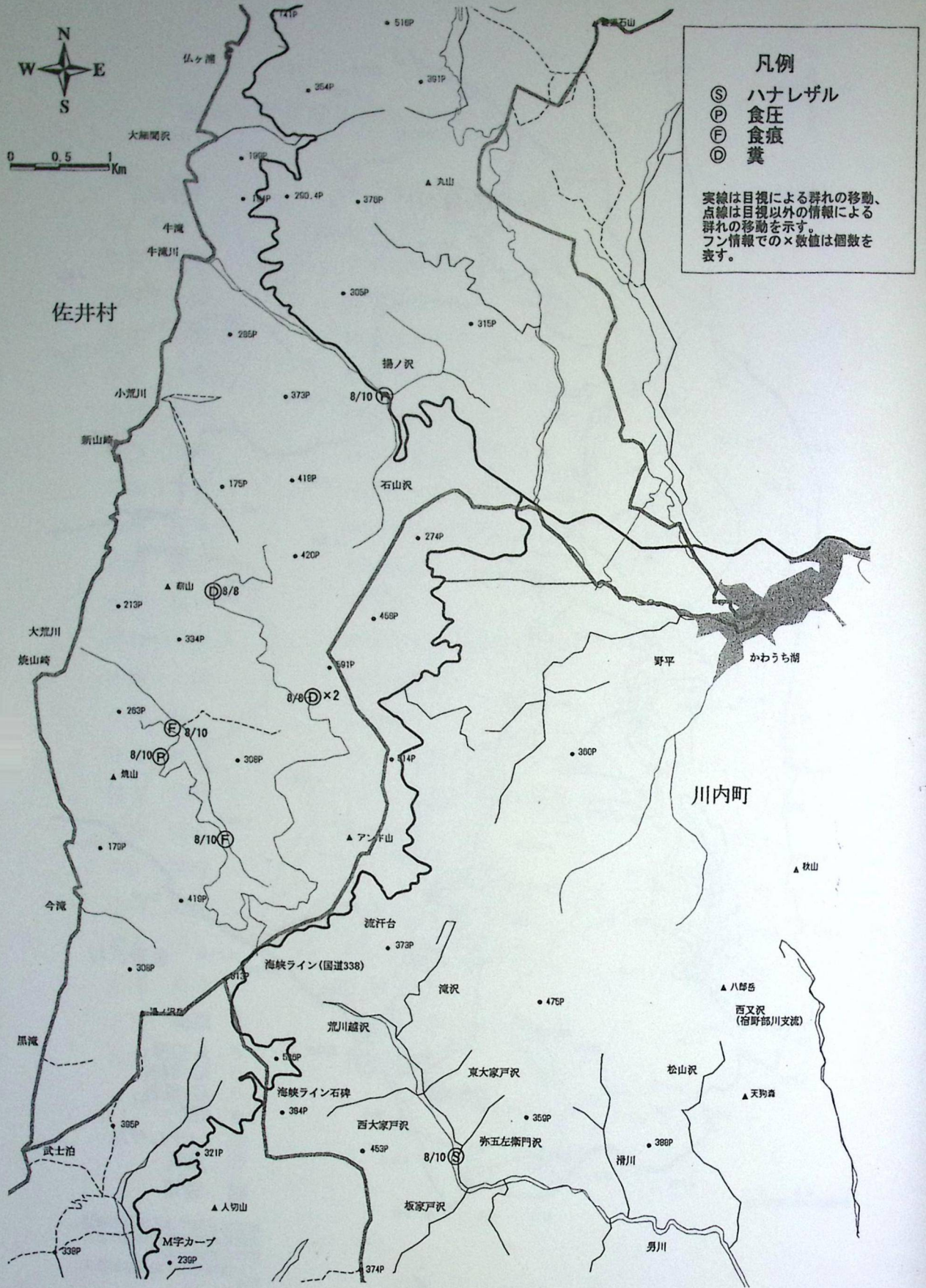


図2 2002年夏季ニホンザル調査結果(佐井村・川内町)

2002年 冬季ニホンザル調査報告

(2002年12月24日-29日実施)

植月純也

2002年秋の実りは、ブナ、クリ、ミズナラ、ヤマブドウ、サルナシ、ホオノキなどが平年作であり、サルたちにとって恵みの実りとなったのではなかろうか。

調査始め2日間については降雪が時々見られたものの穏やかな天候が続いたが、後の4日間は冬の気圧配置が強まり、強い風が吹き、吹雪くことが多かった。気温もこの冬一番の冷え込みを記録し、積雪はあるものの足跡が残り難い状況のもとでの調査であった(末尾、気象データ参照)。

目的としていたことのうち、A2-84群、A2-85群、A87群、O群の調査は追跡、個体数の確認など順調に行ったが、その他のU群、B群、男川の群れについては、悪い調査条件であったということもあり、群れの確認ができなかった。また、タイワンザル等、尾の長いサルの確認もなかった。今回の調査中、A2-84群のサブグループピングが2日間連続して調査最終日まで認められたことは、昨年度の調査中、遊動域を東へ広げ辰内沢まで群れが行ったことと合わせ、今後の動向に注目する必要がある。

調査の始めは少人数で始まり、終わりに従い、人が多くなり、調査地域も拡大していった。参加人数は総勢で27名となった。調査に限らず、生活面でも寒さのため、トイレが凍ったり、トイレの水があふれたり、船が欠航したりと苦勞を伴った。

調査結果

<A2-84群>

12月24日(晴時々雪、積雪あり)瀬野川下流左岸尾根、中学校の北側にて群れを発見(8:30)。群れは中学校の北側を東へ移動したのち、南へ転進し、林道を横断し、瀬野にある大きな電気柵の畑内まで移動(16:10)。途中、林道横断時にカウント71頭(もしくは80頭)+ α 。

12月25日(曇時々晴、積雪あり)瀬野にある大きな電気柵の畑でサル6頭を発見(8:50)。続いて新井田集落西側で牛の首農村公園の方へ渡り始めた(9:07)。20頭が渡ったが、残りは県道山側斜面を西へ移動。渡った個体も県道を渡り返した。群れは寄浪の畑脇まで移動(16:00)。

12月26日(雪、積雪あり)寄浪の畑近くにて群れを発見(10:00)。群れは寄浪の墓場、集落内を緩慢に東へ移動(15:40)。

12月27日(雪、積雪あり)寄浪の畑奥にて群れを発見(9:10)。群れは東へ移動。68頭が牛の首農村公園に入った。県道を渡らない個体を少なくとも10頭確認。合計78頭+ α (16:20)。

12月28日（雪のち曇、積雪あり）午後、サブグループピングしていることが確認された。

その1 牛の首岬のあずま屋近くにて群れを発見し追跡する（9:00）。一時、見失うが、少し離れたあずま屋北側の尾根から海岸にかけて広がる群れを再発見（11:45）。群れは1日、ほぼ同じところで観察された（16:10）。海岸から尾根上に広がるサルを部分カウント。27頭+ α で、 α は多いと思われた。

その2 瀬野神社前にて7頭を目視（13:15）。続いて県道に面した崖の上を横断するところでアカンボウ5頭を含む17頭をカウント（13:20）。先の7頭と17頭を合わせ24頭。牛の首岬周辺に広がるグループとは750m-1000m離れている。新井田の県道上に牛の首岬の方から瀬野の方向へ向かう足跡を確認。その後、サルは北方向へ移動し、中学校西側でヤマグワの樹皮を食べているところでアカンボウ4頭を含む20頭+ α をカウント。 α はそれほど多くないと思われる。さらに北方向へ移動し、瀬野の大きな電気柵の畑北側まで移動（15:30）。

12月29日（雪、積雪あり）昨日に引き続き、サブグループピングが確認された。

その1 昨日、群れがいた牛の首岬のあずま屋付近でサブグループピングしたグループの1つを発見（9:04）。このグループは北東、新井田の方へ移動開始（10:30頃）。ここでゴマを含む部分カウント26頭。新井田で県道を横断。県道を横断するところでカウント36頭（11:05-14:00）。

その2 昨日の最終確認地点、瀬野の大きな電気柵の畑北側にてサブグループピングしたグループの1つを発見（8:55）。この時点で14頭を確認。こちらのグループもゆっくり北東へ、中学校野球場掲示板裏の松林まで移動。10:25に比較的大きく移動した際に数のみ23頭カウント。その後、野球場裏の林内にいるサルをカウント22頭+ α 。 α は1、2頭と思われる（10:35）。ここまでの移動距離は250m弱であった（11:26）。ここでグループその1のカウントのため、調査を終了。

カウント結果 (12月27日、12:36-16:30)

寄浪の方から牛の首岬の方へ県道を渡るところ

オトナ	♂	6頭 (右足を跛行している個体、鼻ピアス含む)
	♀	18頭
	性不明	3頭
ワカモノ	♂	6頭
	♀	5頭
	性不明	4頭
5歳	性不明	1頭
4歳	性不明	2頭
3-4歳	性不明	4頭
3歳	性不明	1頭
2-3歳	性不明	4頭
2歳	性不明	3頭
1-2歳	性不明	2頭
1歳	性不明	3頭
ベイベー	性不明	6頭
年齢性不明		10頭+ α (県道を横断しなかった個体)
合計		78頭+ α

注) 鼻ピアスは、鼻 (鼻孔近く) にピアスをつけるような穴の開いているワカモノオスに付けられた名前。

このカウント中ではないが、シャチとゴマを確認している。また、12月24日には71頭もしくは80頭+ α をカウントしている。

ただし、松岡史朗氏が12月13日に田ノ頭林道を横断した時に89頭をカウントしている。

<A2-85群>

12月24日 (曇のち雪、積雪あり) 脇野沢川左岸、源藤城北側の農道脇で群れを発見 (8:44)。群れは源藤城の集落の周りを時計周りに移動。脇野沢川右岸の発見地点対岸まで達した (16:00)。途中、源藤城神社の北側の林道を横断するところでカウント49頭。

- 12月25日(曇時々雪、積雪あり) 脇野沢川右岸、源藤城南側にて群れを発見(8:32)。
群れは脇野沢川右岸を片貝まで南下したのち、国道を横断。その後、群れは脇野沢川兩岸を滝山農村公園の東側まで移動(16:00)。途中、国道横断時にカウント48頭。
- 12月26日(雪、積雪あり) 上滝山沢下流左岸からのサルの鳴き声を確認(9:15)、続いて群れを発見(9:25)。群れは南下し、下滝山沢右岸へ超えたのち、下滝山沢右岸、尾根近くを上流方向へ林道横断地点の手前まで移動(14:30)。途中、電気柵で囲まれた畑のすぐ北側の林道を横断するところでカウント46頭。
- 12月27日(雪のち曇、積雪あり) 下滝山沢中流右岸にて群れを発見(9:10)。群れは長時間を掛けて左岸へ移動(13:40)。途中、林道を横断するところでカウント49頭。
- 12月28日(雪のち曇、積雪あり) イノシシの館、東側の谷にて群れを発見(11:30)。群れは脇野沢川左岸を南へ移動、七引橋南200mのスギ植林地に達した(16:36)。
- 12月29日(雪、積雪あり) 田ノ頭沢下流右岸、国道近くにて群れを発見(8:40)。群れは一日動かなかった(15:15)。

カウント結果(12月24日、10:00-11:00)

源藤城神社の北側林道を横断するところ

オトナ	♂	2頭(ゴンズイ、カマス)
	♀	14頭(ムギ、タチフジ、ハギ、ナス、シロザ、コナス、カズラ、アンズ、アカネ、ウルシ含む)
ワカモノ	♂	3頭(6-7歳1頭、4-5歳2頭)
	♀	4頭(ナツフジ、ヨモギ含む)
3-4歳	♂	1頭
	♀	3頭
2-3歳	♂	2頭
	性不明	3頭
1-2歳	♂	6頭
	♀	2頭
	性不明	5頭
ベイビー	性不明	4頭
合計		49頭

ベイビーの性別は後日、♂4頭と確認された。4頭のベイビーはムギ、シロザ、ナスビ、ヤマフジの子。

<A87群>

- 12月24日(晴、積雪0-15cm)九艘泊川上流部左岸、新設道路沿いに広がる群れを発見(9:31)。新設道路沿い(ほとんどが工事現場)に約700m、九艘泊方向へ進んだ(15:50)。途中、カウントを3回実施。それぞれ22頭、19頭、22頭。
- 12月25日(雪のち晴、風が強い、積雪30cm)瀬野川上流右岸の小沢左岸で群れを発見(11:36)。群れは北東方向へ約750m移動(14:45)。途中、22頭をカウント。雪上に残った足跡から、昨日は尾根を挟んで瀬野川と九艘泊川の両側に分かれて泊まった様子。
- 12月26日(雪、積雪30cm)村営スキー場がある沢(脇野沢川右岸、ニノワタリ沢の下流の沢)上流部にて群れを発見(11:02)。群れはほとんど動かず、約50m北東へ移動した。樹上でカラスザンショウの実を中心に採食しているところでカウント16頭。
- 12月27日(曇時々吹雪、積雪30cm)情報なし。翌日の調査で瀬野川において27日分の足跡を確認した。
- 12月28日(雪のち曇、積雪30cm)26日に群れがいたところ、村営スキー場のある沢上流部にて群れを発見(15:10)。数十メートル西へ移動し、ヒバ林の中へ入った(16:00)。確認個体は11頭。
- 12月29日(雪時々曇、積雪あり)村営スキー場のある沢上流部にて群れを発見(9:40)。群れは西へ尾根を越え、瀬野川に入った(15:00)。確認個体は18頭。

カウント結果(12月28日、29日の両日に個体識別により頭数を確認)

オトナ	♂	5-6頭(ハッカクを含む)
	♀	3頭(クルミ、ワラビ、アケビ)
ワカモノ	♀	4頭(クルミン、コゴミ、コクワ、シドケ)
4歳	♂	1頭(クルミの子)
	♀	2頭(チェリー、アケビの子)
3歳	♂	2頭(クルミの子、ワラビの子)
2歳	♂	2頭(サクラの子、ワラビの子)
	♀	1頭(アケビの子)
1歳	♂	2頭(アケビの子、コゴミの子)、同♀1頭(コクワの子)
ベイベー	♀	1頭(クルミの子)
合計		23-24頭

ただし、中山裕理氏が12月11-16日にかけて25-26頭確認している。

<O群>

- 12月24日(曇時々晴、時々雪、積雪15-30cm)群れは発見できず。青石海岸で多数のサルが海草を採食しており、南へ向かったとの情報あり。また、青石の稜線上、鞍部の10m程南で北へ向かう足跡1頭分(2-3日前?)、同鞍部の20m程北で北へ向かう足跡、大小2頭分(2-3日前?)、面木稜線上、鞍部の30m程南から面木林道へかけて大小様々な多数の足跡(1日以内くらい)が東へ向かっており、牧場手前の伐開地の西で北へ向かっているのを確認。夕方、細間沢の支流、青石沢にクワがいることが電波の受信状況から推測された。
- 12月25日(曇時々雪、積雪あり)青石沢左岸、青石林道車止め手前で稜線の方からの声を確認(9:27)。青石稜線東でサル4頭目視(9:34)。群れは青石沢右岸に渡ったのち、青石沢右岸斜面を下流方向へ移動した。その後、折り返し、青石沢右岸尾根沿いに上流方向へ中流部まで移動した(16:40)。途中、青石林道近くのササ藪で部分カウント22頭(オトナメス9頭、ワカモノメス2頭、オトナオス3頭)。
- 12月26日(雪、積雪あり)細間沢左岸、細間林道(青石沢出合と穴間沢出合の間)沿いに広がる群れを発見(9:04)。群れは細間沢左岸を下流方向へ進み、青石沢出合付近まで移動したのち、細間沢右岸へ渡り、南へ進んだ(16:20)。途中、青石沢左岸斜面を移動するところで部分カウント24頭、細間林道を渡るところでカウント41頭(足跡、大5頭分含む)。群れの発見時、既に細間沢右岸に渡っていた個体があったこと、死角があったこと、風があり、場所によっては足跡がすぐに消える状況であったことなどから数え落としの可能性はある。
- 12月27日(雪、積雪あり)細間沢右岸、前日の最終確認地点にてオトナメス1頭目視(9:00)。群れは東へ尾根を越え、下細間沢左岸に入り、下細間沢左岸を南(上流方向)へ移動。さらに群れは下細間沢右岸に渡ったのち、南東へ右岸斜面を登る。下細間沢右岸尾根、独立標高点216m付近を南東へ越え、ニノワタリ沢に入った(16:00)。
- 12月28日(雪、積雪あり)ニノワタリ沢左岸、独立標高点216mの北東側(昨日の最終確認地点付近)に広がる群れを発見(9:00)。群れはニノワタリ沢左岸の小尾根をゆっくり南へ越えた(16:30)。一日の観察時間中、群れは昨日の最終確認地点付近に留まり、100m程しか移動しなかった。途中、部分カウント14頭。
- 12月29日(雪、積雪あり)ニノワタリ沢最上流部(昨日の最終確認地点の南、約100m)にて群れを発見(9:00)。群れは観察終了(15:35)まで停滞して採食していた。途中、部分カウント10頭のみ。

カウント結果 (12月26日 12:00-13:20)

細間林道 (青石沢出合付近) を渡るところ

オトナ	♂	2頭
	♀	11頭
	性不明	2頭
ワカモノ	♀	2頭
	性不明	8頭
5-6歳	♂	1頭
3-4歳	♂	1頭
	性不明	2頭
2-3歳	♂	1頭
	性不明	4頭
1-2歳	♂	1頭
ベイベー	性不明	1頭
足跡	大	5頭分
合計		41頭 + α (足跡5頭分含む)

既に渡っていた個体や死角があったことから数え落としの可能性もある。また、風が強く、足跡が消えやすい状況であった。このカウント中ではないが、ブナとクワを目撃している。

備考

12月24日に面木林道で見られた多数の足跡については、今回の調査中、目撃したO群(ブナとクワを含む)と同一なのか、別なのか不明な点がある。ただ、12月26日に41頭 + α がカウントされたことで分派行動しているO群の別のグループとは考え難い。

<湯ノ沢岳、人切山、蛸崎越沢、海峡ライン、長右衛門林道、牛滝、福浦方面>

U群、B群などを探するため、踏査を行った。牛滝と福浦の間の大細間沢においてZ2B群を発見。20頭まで数えた。

○湯ノ沢岳、人切山、蛸崎越沢、海峡ライン、長右衛門林道方面

12月26日(雪、積雪10-45cm)2パーティー2名で、武士泊林道(起点から終点)を経て武士泊海岸、更に湯ノ沢岳、標高450m付近尾根線からトラバースして海峡ラインを下るコースと、海峡ライン(標高450m付近鞍部)からトラバースして湯ノ沢岳の尾根線に出たのち、脇野沢川沿いに武士泊林道起点まで下るコースを踏査。ともにサル情報は得られず。

12月27日(曇、積雪あり)1パーティー2名で、蛸崎越沢の左股と右股、源藤城林道を踏査するが、サル情報は得られず。

12月28日(吹雪、積雪0-80cm)3パーティー4名で、武士泊林道(起点から終点)を経て、湯ノ沢岳山頂に登り、脇野沢川沿いにするコースと、海峡ラインを石碑まで登り、人切山の東斜面上部を経由し、蛸崎越沢を下るコースと、海峡ライン(湯ノ沢岳東の暗部手前)往復のコースに分かれて踏査。悪天候のこともあり、ともにサル情報は得られず。

12月29日(雪、強風、積雪0-80cm)2パーティー3名で、蛸崎越沢から二股山に登ったのち、引き返し、源藤城林道を踏査するコースと、海峡ラインから長右衛門林道(新山鞍部まで)往復するコースに分かれて踏査。悪天候のこともあり、ともにサル情報は得られず。

○牛滝方面

12月27日(晴時々雪、強風が吹く、積雪30cm)4パーティー4名で、牛滝から福浦にかけての国道338号線、野平より福浦へ続く林道、野平から牛滝周辺へかけての国道338号線と石山沢・揚ノ沢下流部、かわうち湖に注ぐ福浦川沿いの林道を踏査。大細間沢右岸でZ2B群を発見(11:50-12:55、14:42、15:21-15:28)。発信器装着のオトナオスを含め20頭を確認。

<男川、口広沢、小沢方面>

男川の群れなどを探すため、踏査を行った。男川林道、小川平沢出合の上流と滑川出合の上流にて複数の足跡を発見したほか、1頭分の足跡を2箇所を確認した。

○男川方面

12月26日(雪、積雪15-45cm)1パーティー2名で男川林道を蛸崎の集落から弥五左衛門沢出合までと滑川林道、起点から約1kmを踏査。サル情報は得られなかった。

12月27日(曇時々雪時々晴、積雪あり)1パーティー1名で、男川林道を蛸崎の集落から滑川林道(起点から約100m)までと小川平沢(男川本流出合から上流約1.2km)を踏査。滑川林道(起点から約100m)にてヤマグワ1本に芽の食痕を確認。

12月28日(雪のち曇、積雪あり)1パーティー1名で、男川林道を蛸崎の集落から荒川越林道(起点から約600m)まで踏査。復路、1頭分の足跡が、小川平沢出合から男川本流沿いに上流方向へ約900m続くのを確認(13:50)。また、小川平沢出合でサルトリイバラの実の食痕を確認。他に足跡がなかったことからハナレザルと思われた。

12月29日(雪、強風、積雪0-80cm)1パーティー1名で、海峡ラインを石碑の先まで登ったのち、男川の荒川越沢に下り、男川林道を男川河口まで踏査。男川本流、

滑川出合の上流 650-800m (昨年度の調査で足跡 10 頭+ α を確認した場所の近く)にかけて 3 頭分の足跡が離れたところから林道上に出てきて上流方向へ向かっていることを確認。また、男川本流、小川平沢出合上流 450m-1km にかけての 4 箇所において各 1 頭分の足跡を確認。個々の足跡に繋がり認められなかったが、1、2 頭のサルが移動した跡とも 4 頭のサルが移動した跡とも考えられた。その他、荒川越沢下流左岸にて 1 頭分の足跡が上流方向へ向かっていることを確認。また、確実ではないがサルと思われる足跡が次の 2 箇所でも確認された。西家戸沢下流にて 1 頭分の足跡が下流方向へ向かっているもの、男川本流、権左衛門沢出合付近を 1 頭分の足跡が下流方向へ向かっているもの。

○口広沢、小沢方面

12月28日(雪のち曇、積雪あり)1パーティー2名で、滝山林道起点から東へ尾根を越え、口広川へ抜けたのち、権左衛門沢まで上流に登り、ここから口広川沿いに下流に下り、海まで踏査。口広川上流部にてヤマグワ2本の芽に食痕を確認。

12月29日(雪、積雪あり)1パーティー1名で、小沢川、深石沢を踏査。サル情報は得られなかった。

<A1 群> (野猿公苑で飼育されている)

12月30日(晴、積雪あり)8名で実施。

A1 群とは異なるが、2001年3月に九艘泊で捕獲されたのち、A1 群の飼育されていた檻の一部を仕切り、飼育されているオトナオス1頭を「+1 頭」と区別して表記する。

合計 50 頭+1 頭

「構成」

オトナ 27 頭+1 頭 (オトナオス 7 頭+ α +1 頭含む。 α は0 頭から少数頭)

ベイビー 4 頭。

<ハナレザル>

ハナレザルの目撃はなかったが、12月28日、男川(小川平沢出合付近)においてハナレザルと思われる足跡を確認した。また、12月29日の男川(荒川越沢等)において見られた1頭分の足跡もハナレザルの可能性がある。

<タイワンザル等、尾の長いサル>

タイワンザル等、尾の長いサルの目撃情報はなかった。

食べ物リスト

自然のもの

ヤドリギ (葉、茎)、サルトリイバラ (実)、ササ (葉、脇芽、茎。クマイザサの脇芽含む)、スギ (葉)、ヤブマメ (実)、マツ (種子、葉、樹皮。カラマツの実、松葉の根元含む)、クルマバソウ (葉)、ツルウメモドキ (実、芽)、シロツメクサ (地下茎、葉)、ミズナラ (実、芽)、クリ (実、芽)、イネ科 (葉)、ヨモギ (種子)、ガマズミ (実)、ツリバナ (芽、樹皮)、ノイバラ (実)、ヤナギ (芽)、スゲ科 (葉)、マユミ (実)、コマユミ (芽)、ホオノキ (樹皮)、オニグルミ (芽)、アオダモ (芽、樹皮)、サクラ (芽)、ヒバ (葉)、ヤマグワ (芽)、カラスザンショウ (実)、サルナシ (芽、樹皮。マタタビ科 *Actinidia* 属の樹皮含む)、クズ (種子、樹皮)、ハナイカダ (樹皮)、コシアブラ (芽、樹皮)、ブナ (芽) キブシ (芽)、サルノコシカケの様なキノコ、ミズナラに付くキノコ、海草 (葉)。

畑のもの

アカカブ、ダイコン、ハクサイ、稲の穂 (堆肥用のもの)、長ねぎ、ネギかタマネギ、ニンジン、キャベツ、ジャガイモ、カボチャ。

気象データ (青森県脇野沢地域気象観測所・アメダス。脇野沢小学校、標高 20m に設置)

月日/項目	降水量	最高気温	最低気温	平均風速	最大風速とその方向	最深積雪	日照時間
12月23日	1	2.6	-1.0	0.5	2 西北西	4	3.3
12月24日	2	2.3	-1.3	0.1	1 南東	3	3.9
12月25日	1	-0.2	-3.4	0.1	1 西	7	1.7
12月26日	7	-1.9	-6.9	1.3	3 西北西	15	0.6
12月27日	5	-4.2	-8.5	2.3	5 北西	16	0.7
12月28日	7	2.3	-3.8	2.2	3 西北西	22	0.0
12月29日	5	-1.5	-6.2	2.7	4 西北西	25	0.0
12月30日	2	-2.3	-5.3	2.2	4 北西	25	2.0

表は気象庁 電子閲覧室より抜粋、一部改変。

単位：降水量は mm (観測単位 1mm)。最高気温、最低気温は℃ (観測単位 0.1℃)。平均風速、最大風速は m/s (観測単位 1m/s)。最深積雪は cm (観測単位 1cm)。日照時間は時間。

☆2002年冬季ニホンザル調査は、京都大学霊長類研究所野外観察施設から調査費の一部を援助していただきました。

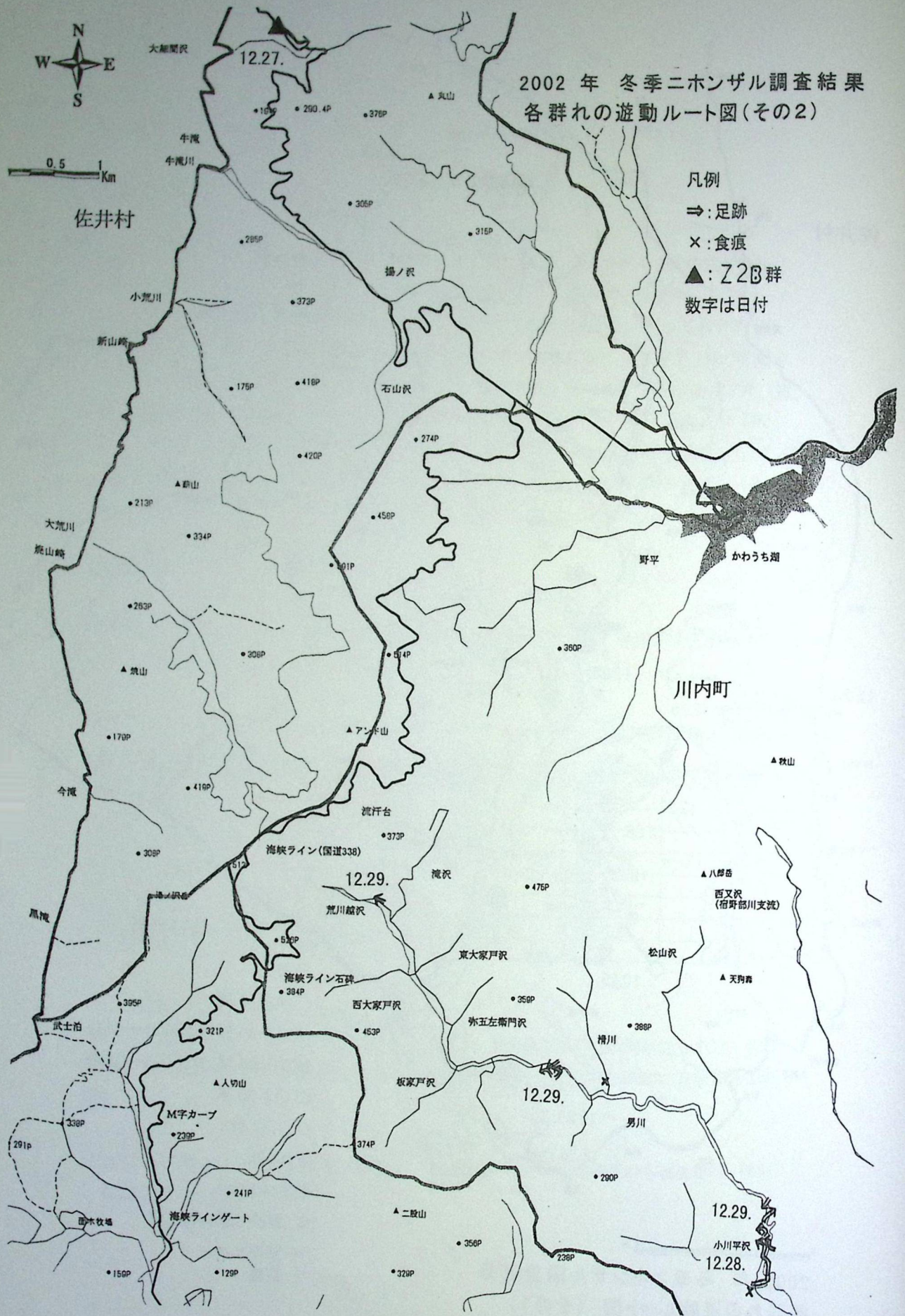


2002年 冬季ニホンザル調査結果
各群れの遊動ルート図 (その1)

- 凡例
- : A2-84 群
 - : A2-84 群(サブグループ1)
 - ⊗: A2-84 群(サブグループ2)
 - : A2-85 群
 - ◇: A87 群
 - : ○ 群
 - 数字は日付
 - : 電柵で囲まれた畑
 - : 移動ルート
 - ×: 食痕

2002年 冬季ニホンザル調査結果
各群れの遊動ルート図(その2)

凡例
⇒: 足跡
×: 食痕
▲: Z2B群
数字は日付



調査員

松岡 史朗・鈴木 邦彦・植月 純也・堀内 史朗・小堀 睦

今年も去年同様雪が少ない冬でした。去年との違いは里の雪解けは速く進んだが山間部の雪は残っており車での移動は楽であったが、入山後はカンジキやスキーが使われました。

2002 年度の補足調査も、2000 年の冬季調査で初めて確認された男川に現れる群れを対象にこの地域を中心に行われました。今回の調査が行われる約 1 週間前に男川流域においてサルを目撃情報が植月氏よりもたらされ、群れの正確な頭数などのより詳しい情報が得られることが期待されました。

ここに 3/23 日の植月氏の情報とあわせて、3/29, 30 の調査報告をしたいと思います。

3/23 の植月氏のサル情報

8:00 過ぎ、男川林道入り口に止めた車から歩き始める。松山沢、滑川、板家戸沢各出合を通過し 15:07 林道終点で折り返した。その後 16:24 滑川—松山沢出合間の男川林道上滑川出合から約 250m 下流にある・ノ木沢出合にて林道を南から北へ横断しながら、下流方向へ移動している足跡を発見する。16:32 サル 1 頭を目撃し、その後 3~4 頭を目視。斜面上部では、警戒音を発しているサルがいるが見えない。内 3 頭はアダルト♂であった。その内 1 頭は、ヤマグワを食べるために約 12m まで接近してきた。17:18 サルが見えなくなる。この間の採食物は、ヤマグワの芽と樹皮、ツル性植物の樹皮、シダ類、スゲ類、アザミ類でした。足跡のカウントは大 10、中 2、小 2 の 14 頭分確認されました。(大 1 頭、小 1 頭分が引き返していたので差し引いた。)



3/23 のサルの遊動図

3/29 の調査報告

この日は、里に近い範囲では曇りのち晴れと比較的落ち着いた空模様だったが、山中では、晴れたり曇ったり時折曇も降る天気だった。

この日は、堀内・松岡組が朝からA2-85群をヌイド沢入り口両岸で、A2-84群をテレメのロケーションによって蛸田で、A87群を九艘泊民家西側（北海岬）海岸線で確認した。その後海峽ラインを徒歩で踏査し、面木林道・細間林道でO群のロケーションを行ったが海峽ライン上で新旧様々なサル糞が確認されたほかにサル情報はなかった。

鈴木氏は男川に入山、滑川を上り滑川源頭部より松山沢に出るルートで踏査を行った。

植月氏も男川にスキーで入り男川林道終点で引き返すルートで踏査を行った。二人は別々に入山したので踏査に時間差があったが古い糞とヤマグワ等の食痕以外の情報はなかった。

小堀は、深石沢入り口から林道終点までと小沢川入り口から浄水場までを踏査後、口広川林道を入り口から踏査し権左衛門沢途中まで踏査したがサル情報はなかった。

3/30 の調査報告

この日は前日の天気が嘘のような好天に恵まれ、松岡、鈴木、植月、小堀はそれぞれ単独で調査を行った。

松岡氏は、朝のうちにA2-85群を桂沢、A2-84群を芋田、A87群を九艘泊で確認。その後蛸崎越林道から453Pに登り、尾根線上を海峽ライン石碑にでて海峽ラインを降りてくるルートで踏査したが、サル情報はなかった。

鈴木氏は、男川林道から小川平沢、サイベタ沢林道に入りそこから小川平ピーク（290.5m）～小沢川の頭（238m）～235Pと来て小沢浄水場に抜けるルートで踏査した。途中古いサルフンやヤマグワの食痕を見つけている。

植月氏は、前日に引き続き男川本流域と松山沢を423Pの南の鞍部から注ぐ小さな沢との出合までと、男川本流の西大家戸沢の出合まで踏査したが、新たなサル情報はなかった。

小堀は宿野部川林道に入り、西又沢林道を天狗森の鞍部までと金八沢林道上を踏査したが、サル情報はなかった。

1.はじめに

ニホンザルは亜種であるヤクシマザルを含めると南は屋久島から北は下北半島まで生息する日本固有の霊長類である。ニホンザルはその豊かな表情や仕草等により人々から愛される存在であるが、その一方で全国各地に農林業被害（猿害）を引き起こし、有害鳥獣駆除として毎年多くの個体が捕獲されている。そこで、今回統計資料を基に国内におけるニホンザルの捕獲頭数を調べた。基とした統計資料は現在環境省（以前は林野庁、農林水産省、環境庁）が毎年発行している鳥獣統計で、調査対象年度は統計にニホンザルの捕獲に関する記載が始まる 1961（昭和 36 年）年度から最新の 2000（平成 12 年）年度までとした。鳥獣統計は目的別に捕獲頭数が記載されているが、各項目の記載年度はそれぞれ異なる（有害鳥獣駆除・学術研究：1961 年度～、飼養目的：1961 年度～1988 年度、傷病鳥獣保護・職務上必要な行為：1981 年度～、その他：1996 年度のみ）。途中で法律の改正により捕獲許可の権限が変化している場合や同一年度内に国と都道府県の双方から捕獲許可が与えられて捕獲している場合があるが、目的名が同じ場合はまとめて結果に示した。また、統計の中でニホンザルではなく、サルと表記されている項目があるが、ニホンザルと推測されるものに関しては筆者の判断で結果に含めた。

2.結果

①有害鳥獣駆除によるニホンザル捕獲頭数

国内における、有害鳥獣駆除によるニホンザル捕獲頭数の推移を示した（表-1）。駆除による捕獲には生け捕りと捕殺の双方が含まれる。捕獲頭数は当初 100 頭ほどだったが、年々増え続け 1975 年に 1000 頭、1985 年に 5000 頭を超え、現在では 10000 頭前後を推移している。

②都道府県別有害鳥獣駆除によるニホンザル捕獲頭数

各都道府県における、有害鳥獣駆除によるニホンザル捕獲頭数を年代別

(表-2～5)と最近5年の各年度別(表-6～10)に示した。以降に示す各都道府県別の表中で北海道、茨城県、沖縄県での捕獲頭数が0なのはニホンザルが生息していないため、表-2で沖縄県の頭数の記載がないのは日本復帰以前で統計に記載がなかったためである。表-6～11に示した結果から近年捕獲頭数が多い県は長野県と千葉県であるが、表-2～5の結果から60年代より多くの頭数を捕獲している千葉県と、近年急激に捕獲頭数が増加している長野県とに捕獲頭数の増加傾向において違いが見られた。千葉県では昭和30年代後半から猿害が発生して昭和41年から駆除による捕獲が行われており、現在被害面積と被害額は減少傾向にあるが、捕獲頭数は増加傾向を示している。一方、長野県では昭和50年頃から猿害が顕在化したあと急激に増加し、それに伴い捕獲頭数も昭和60年度以降増加している。現在被害面積と被害額は横ばい傾向にあるが、被害地域は拡大傾向を示している。

③他の目的によるニホンザル捕獲頭数

ここでは有害鳥獣駆除以外の目的(学術研究、飼養目的、傷病鳥獣保護、職務上必要な行為)によるニホンザル捕獲頭数をそれぞれ示した(表-11～14)。ここに示した捕獲頭数のうち学術研究と職務上必要な行為を目的として捕獲された場合には捕殺されたものも含まれる。学術研究を目的として捕獲する場合の基準は研究の目的が理学、農学、医学、薬学などに関することで捕獲しなくては目的を達成できないと認められるもの、研究内容が鳥獣の生態、習性、行動、食性、生理に関することで長期にわたるものは適正な全体計画があり、研究により得られた成果が学会、学術誌などによって原則として一般に公表されるものとされている。一方、飼養目的による捕獲には具体的な頭数は不明であるが動物園での飼育を目的とした捕獲も含まれ、職務上必要な行為による捕獲には有害鳥獣駆除や学術捕獲等の理由に当てはまらない事例によって捕獲されたものが含まれる。なお、表で示した目的以外にその他の理由という目的で、1996年に当時の環境庁長官の許可により長野県で77頭が捕獲されている。

3. 考察

今回の結果から現在国内で約1万頭以上のニホンザルが捕獲されており、その

頭数の大半は有害鳥獣駆除による捕獲であること、駆除による捕獲頭数は統計開始以降増加傾向にあることが明らかになった。国内に生息するニホンザルの総数が把握できないため、生息数に対する捕獲頭数の割合を示すことはできないが、県内における推定生息頭数と捕獲頭数が明らかになっている複数の県のデータによると少ない県で約2%、多い県で約20%の割合で捕獲されていた。

駆除による捕獲頭数が増加している理由の一つは猿害の発生地域の拡大と被害額の増加である。猿害が増加した原因として広葉樹の伐採とそれに代わる針葉樹の植林によるニホンザルの生息環境の変化、ニホンザルと人間との接触機会の増加、栄養価の高い作物の摂取や餌付けに伴う、初産年齢の低下や毎年出産、幼児期での死亡率の低下等による個体数の増加など様々な理由が挙げられる。電気柵の設置や追い払いの実施等の対策を講じながらも被害が拡大している現状では、農家からの駆除申請に対して行政が許可を認めざるを得ない状況になっている。駆除による捕獲頭数が増加しているもう一つの理由は捕獲の許可権限が国から各都道府県、更には市町村へと委譲されたことである。1998年の調査によると23の県で駆除許可が知事から市町村長に委任されており、駆除申請が出されるとすぐに許可されているのが現状である。有害鳥獣駆除による捕獲は各自治体や農家によって被害概念が曖昧で駆除許可の基準が明確でない、原則的には被害が発生してから駆除が行われるが、実際には予察される被害に基づいて駆除申請され、捕獲されている（予察駆除）、専門の機関がないため捕獲頭数や捕獲による個体群への影響等のモニタリングが不十分、自治体ごとに駆除を行うため自治体をまたがって生息する個体群では適正数以上に駆除される可能性がある等多数の問題点がある。有害鳥獣駆除による捕獲は一時的には被害が減少しても猿害の根本的な解決方法とはならないが、現在のところ効果的な対策がないため今後も捕獲頭数の増加が予想される。

その他の理由による捕獲のうち、学術目的による捕獲では国内において研究が盛んに行われている地域個体群を持つ県での捕獲頭数が多い傾向が見られた。一方で傷病鳥獣保護の目的により捕獲される頭数は今回データを示していないが、90年代に捕獲された頭数が80年代の約20倍（11頭→231頭）と急激に増加しており、増加交通事故や他の動物に襲われたりして負傷したサルが人間に保護される機会が増えたのが原因であると推測される。

4.終わりに

今まで自分が調査を行っている群馬県内のニホンザルに関する資料として鳥獣統計を利用してきたが、今回初めて全国の統計について約 40 年に渡って調べてみて、初めて知ることも数多くあり大変勉強になった。一方で、毎年約 1 万頭のニホンザルが捕獲され、駆除による捕獲頭数の増加傾向が続いている結果から、人間とニホンザルにとって猿害が大変難しい問題であると言うことを改めて認識した。今回調査した 40 年間はそれまでの両者の関係が大きく変化した結果、各地で様々な軋轢が生じ、その対応に苦慮してきた猿害の歴史そのものであり、現在も各地で新たな被害が発生している。初めてサル調査に箱根へ行った時、目の前を群が移動して非常に感動したが、群が移動した後のミカン畑に無数の出荷できなくなったミカンが落ちていた光景も同じく強く印象に残っている。以来猿害の光景や駆除によって捕獲されたサルを見る度に少しでも状況が改善される方法はないかと考えているが、今でも農家の人からサルを何とかして欲しいという話を聞かされて、どのように対応すればいいか判らず戸惑うことがある。今回の報告をきっかけとして、改めて考えていきたいと思う。

最後にこの報告を書くに当たり資料の提供とご助言をいただいた、群馬県環境生活部自然環境課野生動植物保護グループの岡野幸治氏、今井亮二氏と三重県、長野県の各野生動物担当者に深謝いたします。

参考文献、資料

千葉県環境生活部(2002)；千葉県特定鳥獣保護管理計画案（ニホンザル）

長野県林務部(2000)；長野県ニホンザル保護管理計画（旧）

長野県林務部(2002)；長野県ニホンザル保護管理計画骨子、骨子資料。

日本弁護士連合会編(1999)；野生動物の保護はなぜ必要か。信山社

藤森隆郎、由井正敏、石井信夫(1999)；森林における野生動物の保護管理。日本林業調査会

和田一雄；サルはどのように冬を越すか。社団法人囊山漁村文化協会

鳥獣保護法「改正」を考えるネットワーク(1998)；有害鳥獣許可の市町村長への委任状況表。 <http://www.asahi-net.or.jp/~zb4h-kskr/inin.htm>

地球生物会議（2001）；ニホンザルの有害駆除に関する市町村アンケート集計結果報告。 <http://www.biodic.go.jp/cbd/4/WWF/WWF2.pdf>

表-1 日本国内における有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1961~2000)

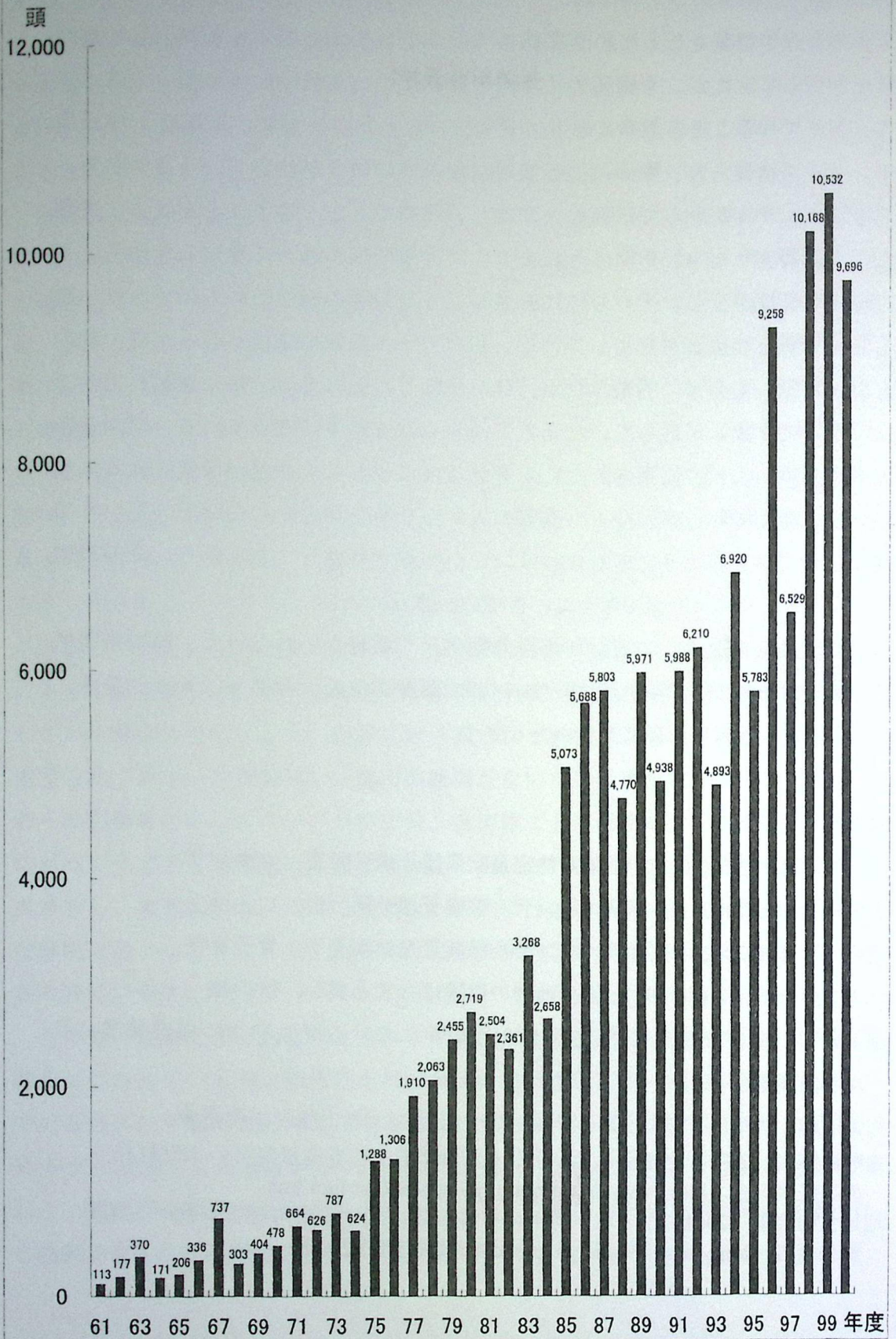


表-2 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1961~1969)

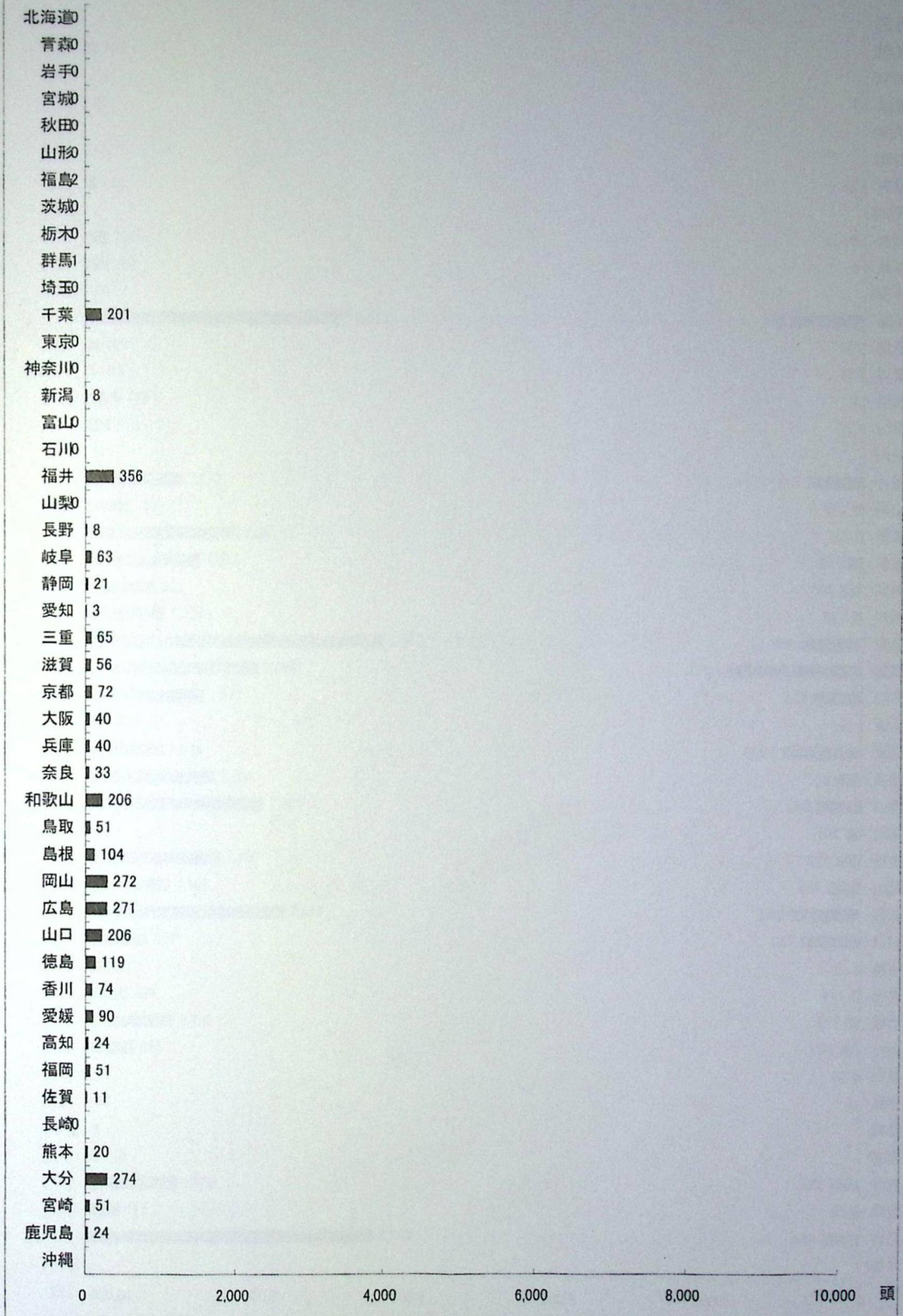


表-3 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1970~1979)

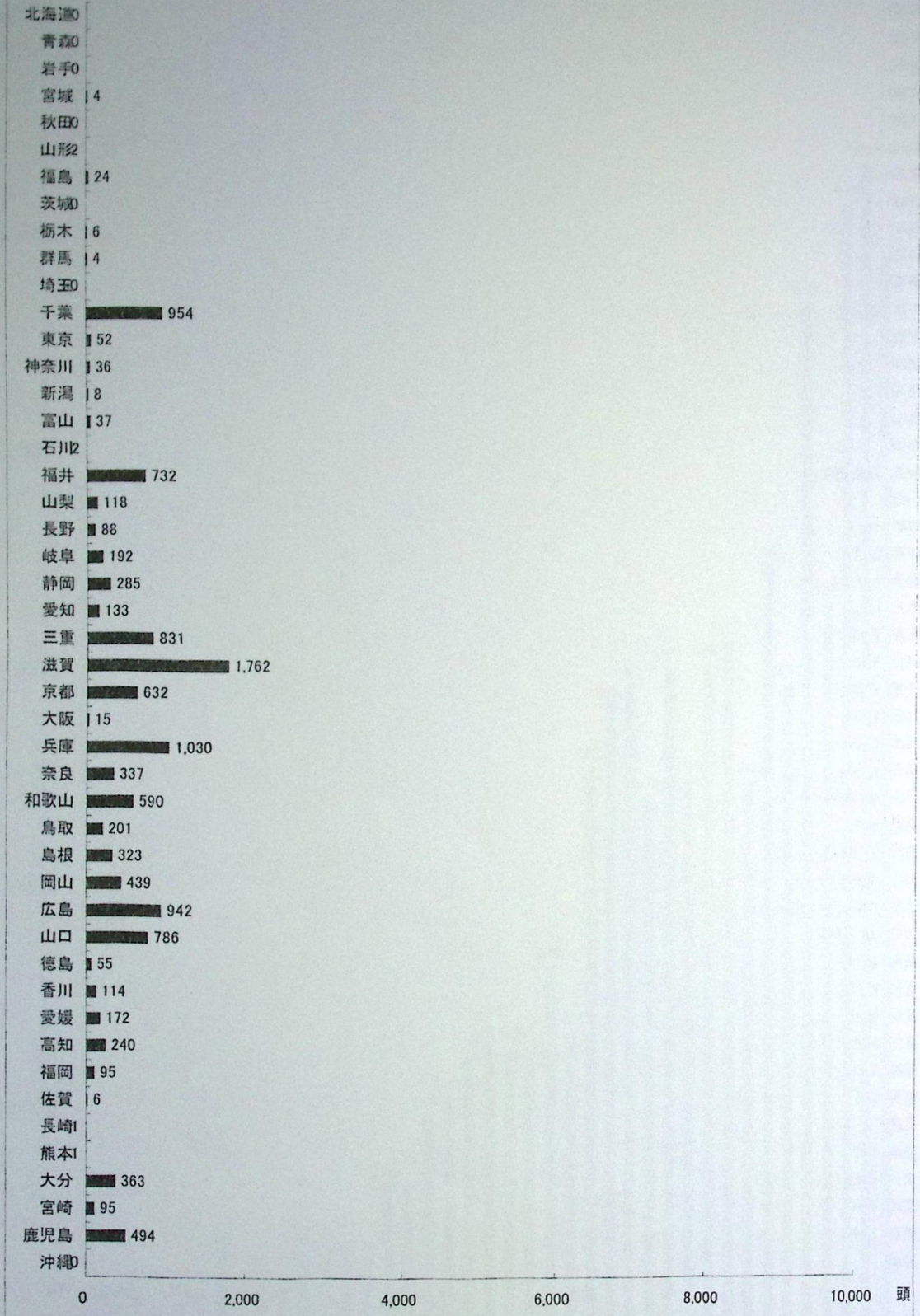


表-4 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1980~1989)

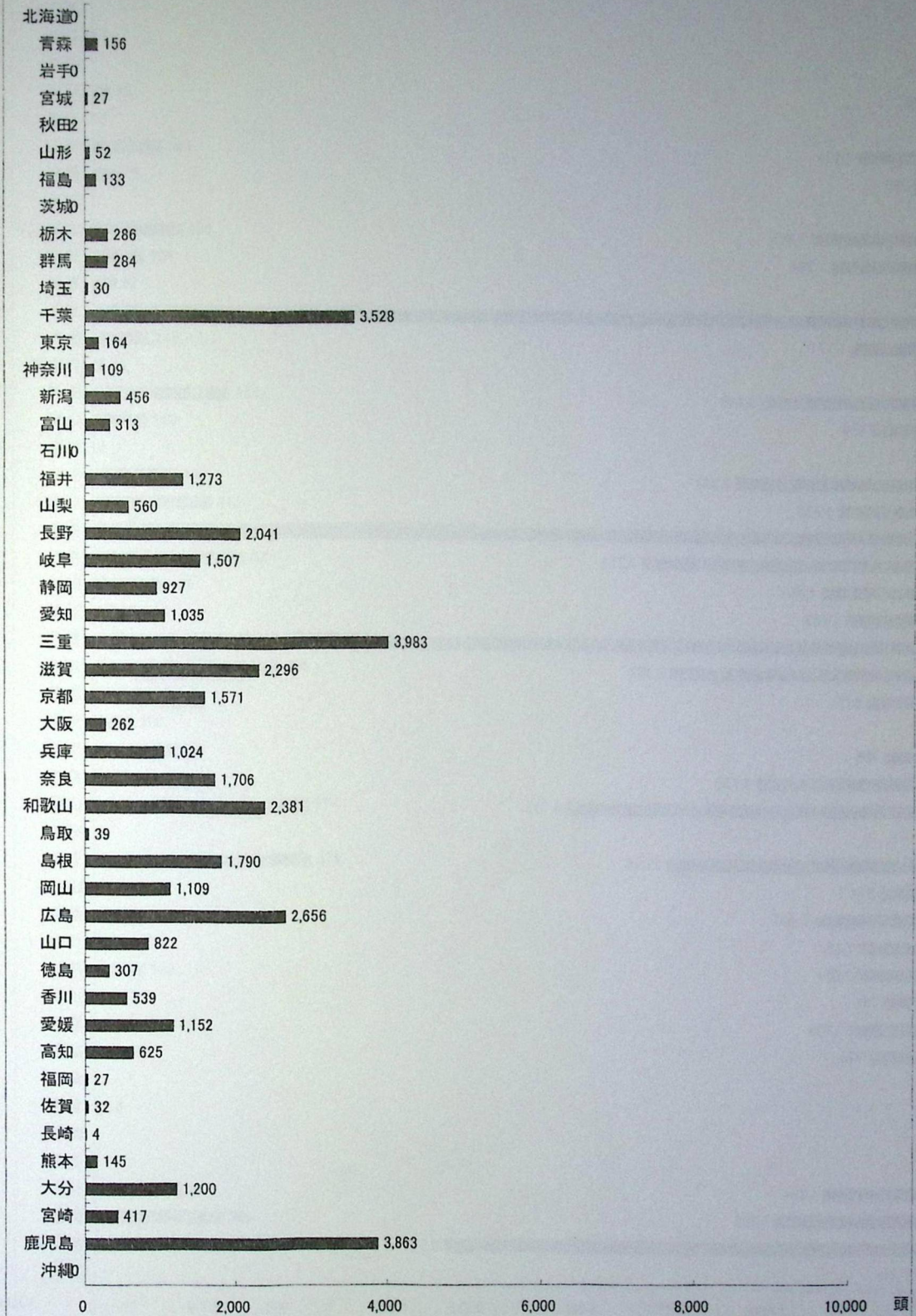


表-5 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1990~1999)

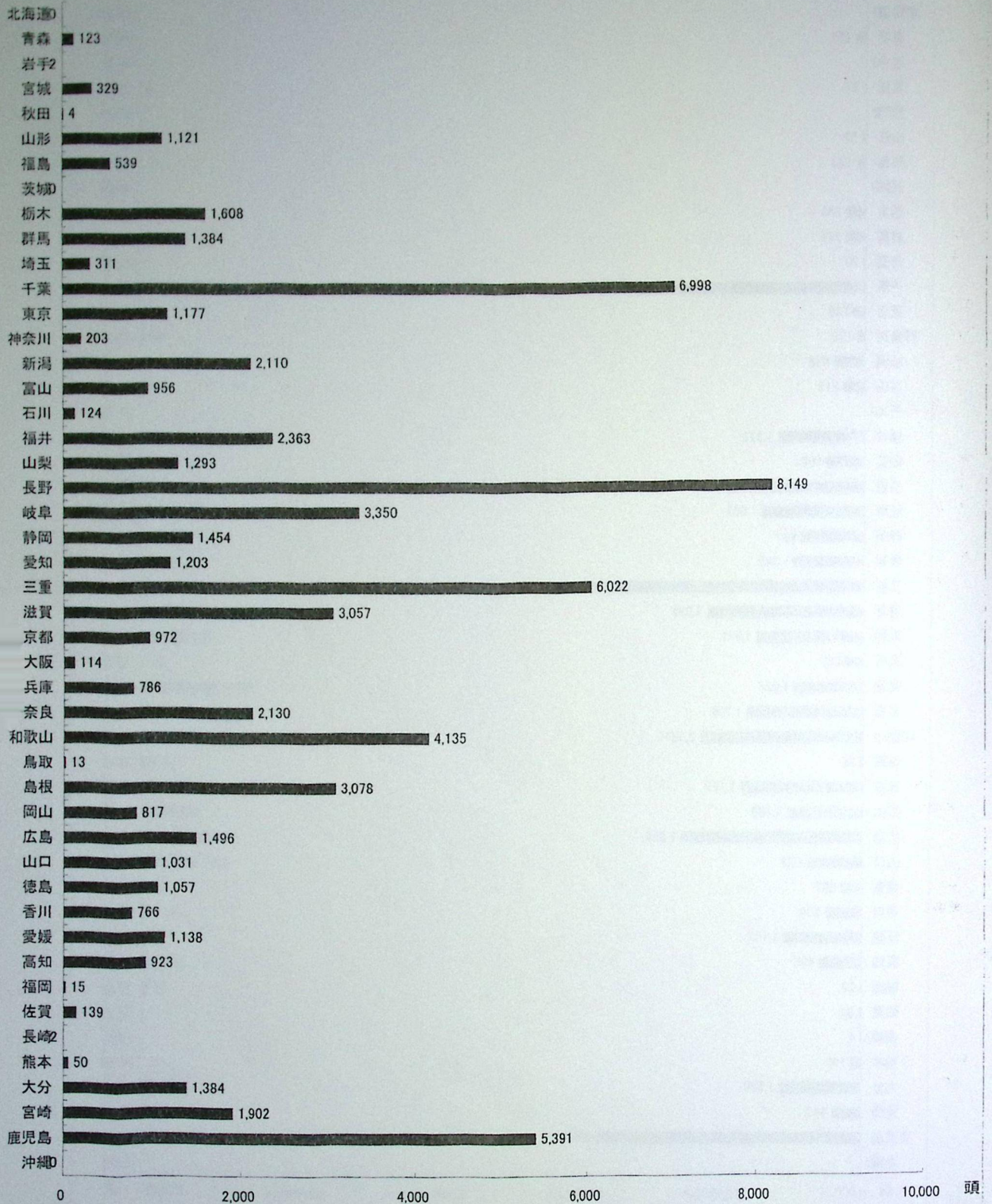


表-6 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1996)

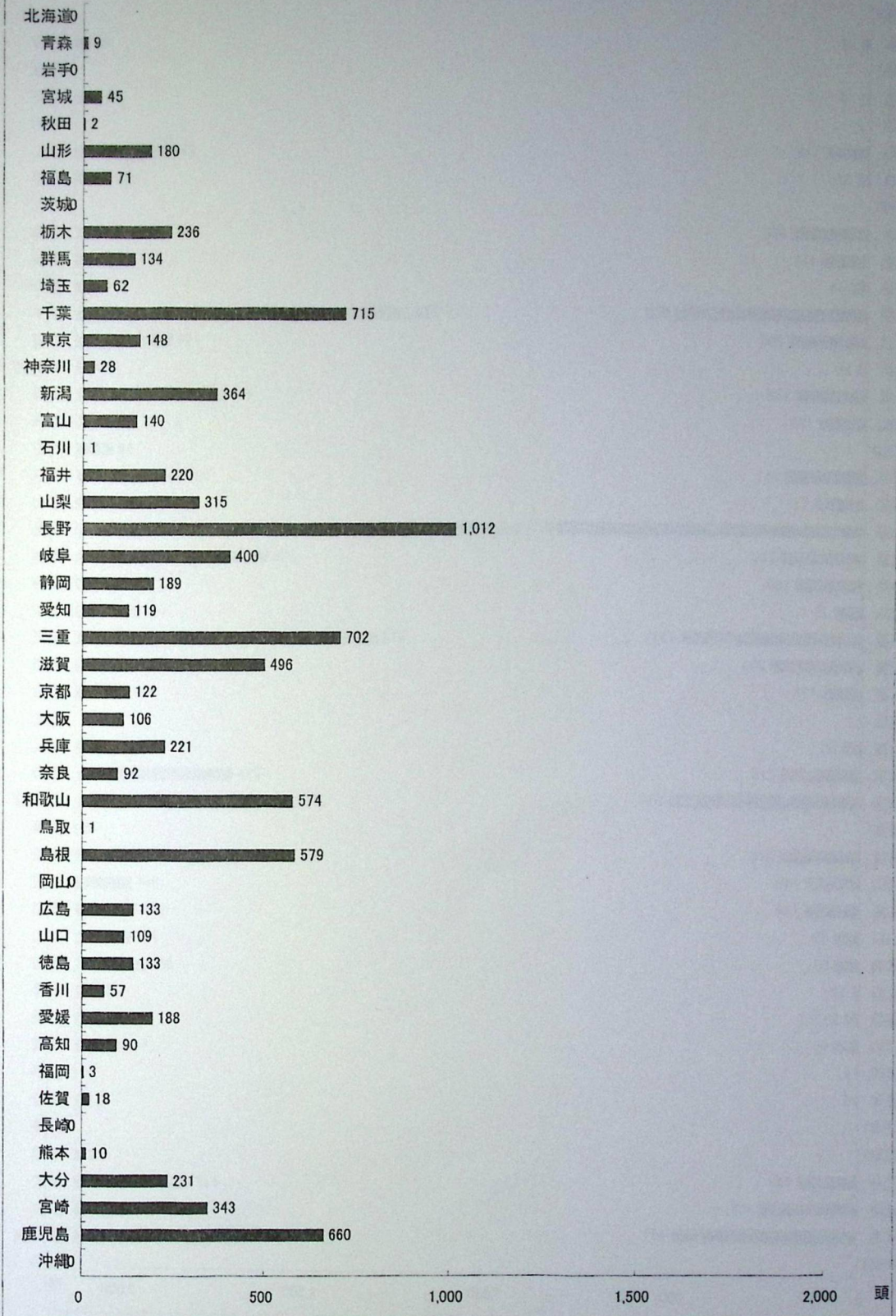


表-7 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1997)

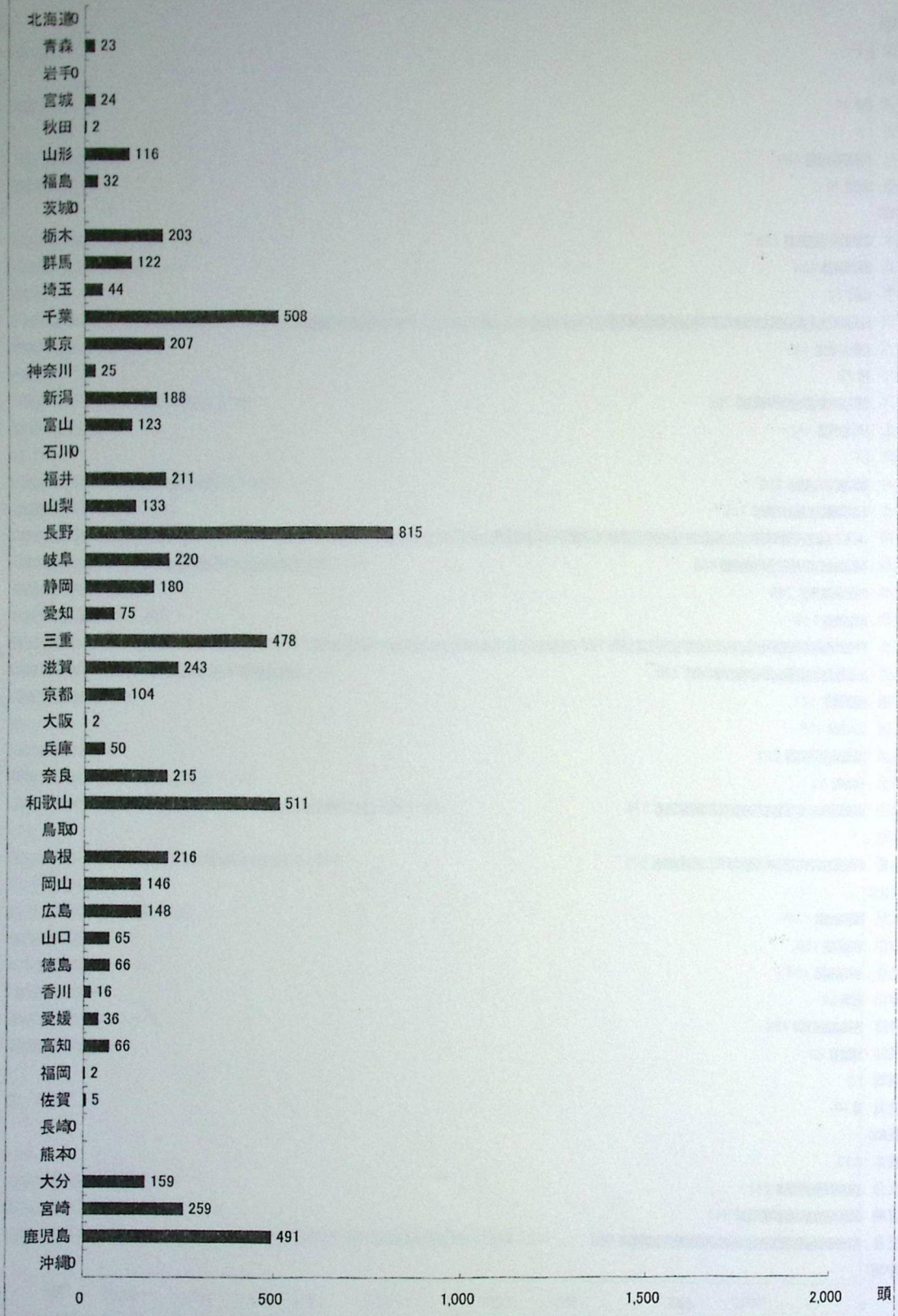


表-8 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1998)

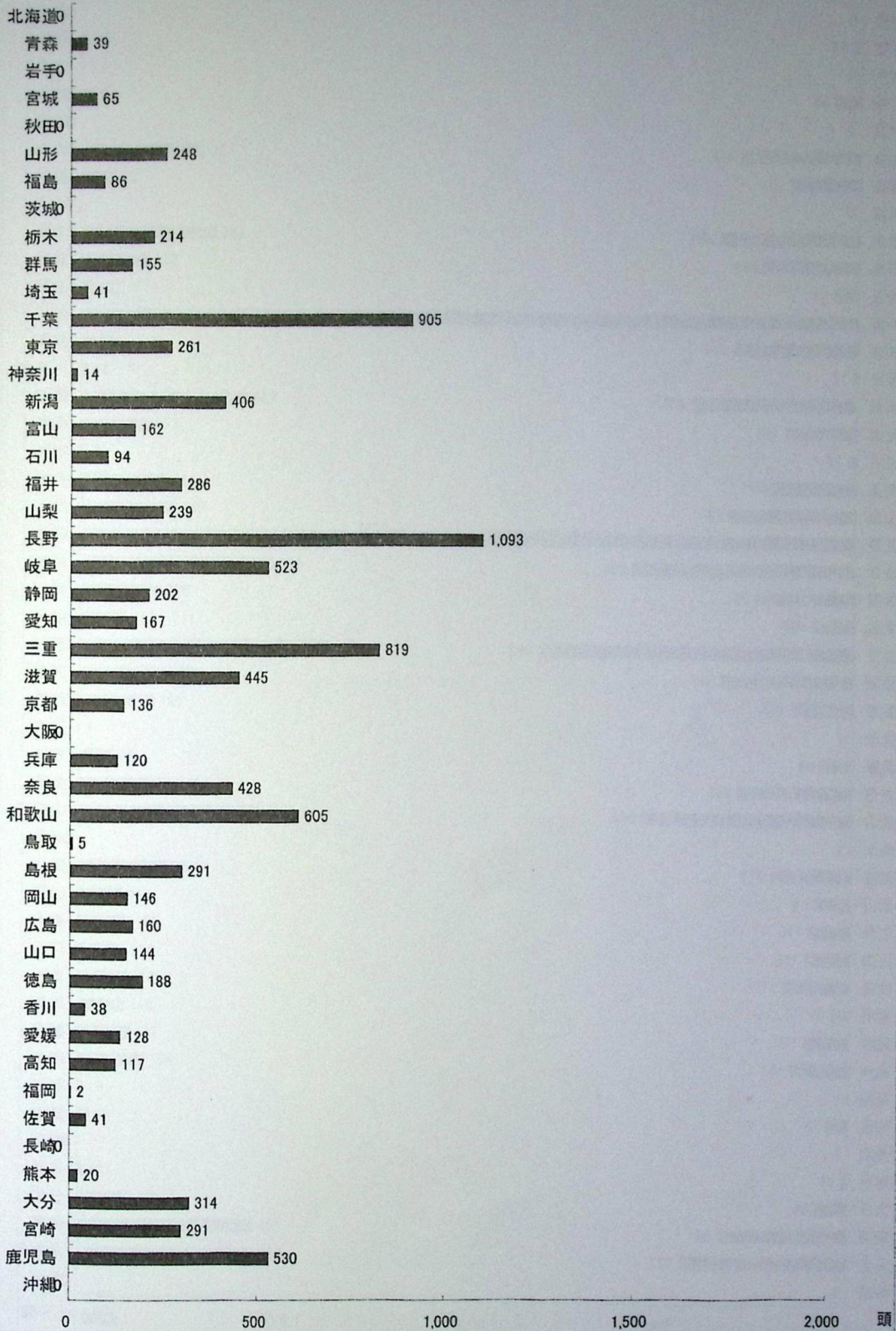


表-9 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(1999)

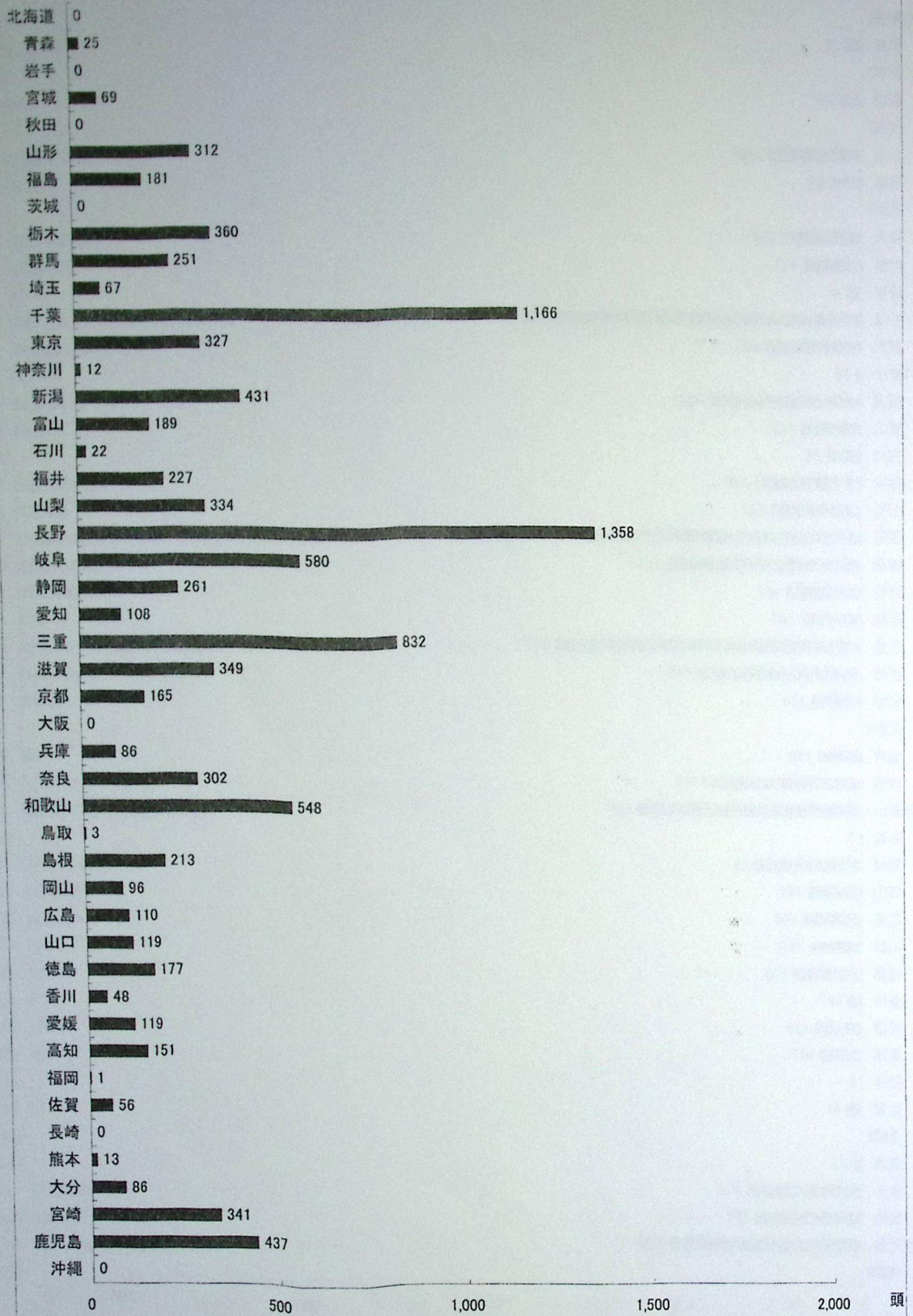


表-10 都道府県別有害鳥獣駆除による
ニホンザル捕獲頭数(2000)

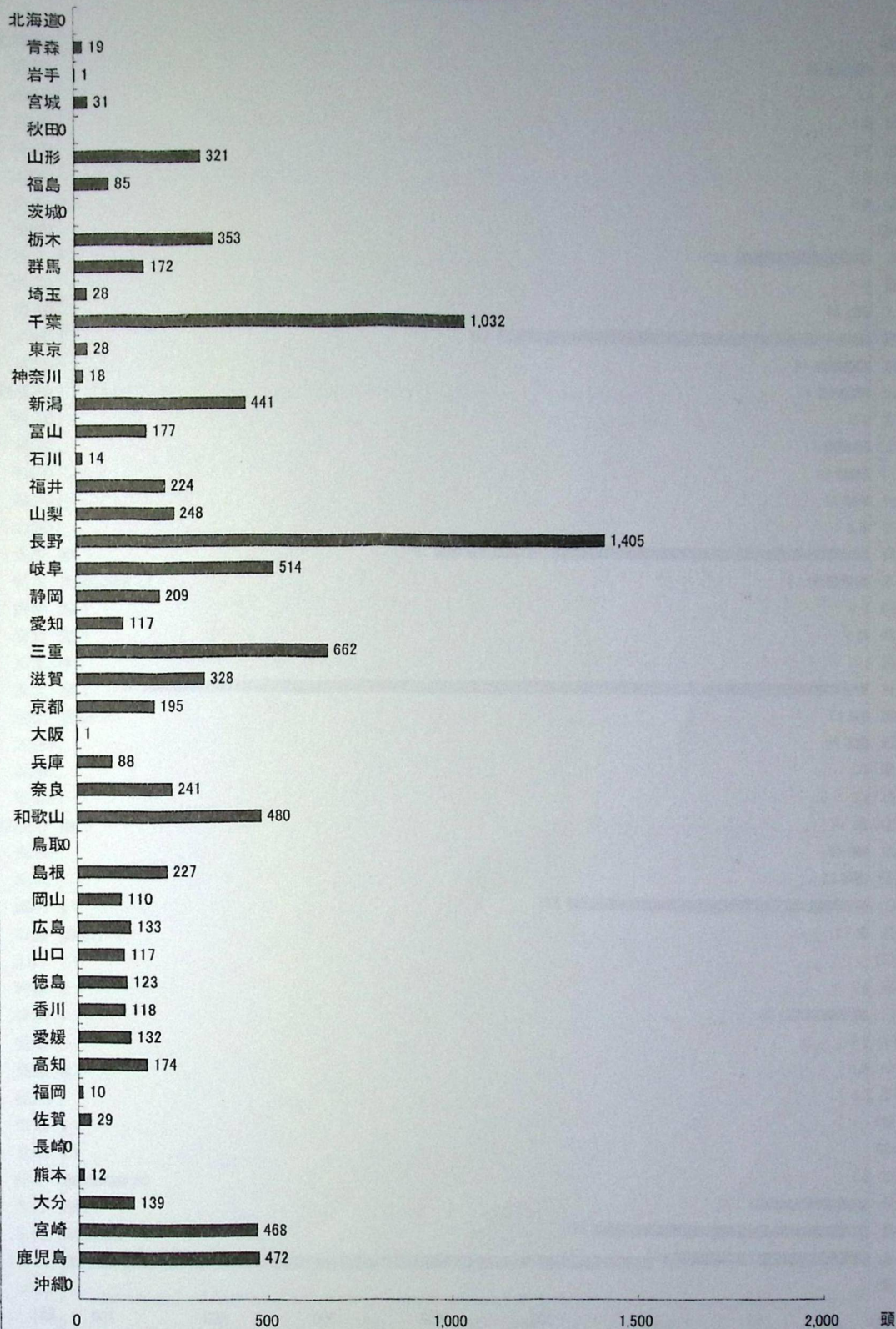


表-11 学術研究によるニホンザル
捕獲頭数(1964~2000)

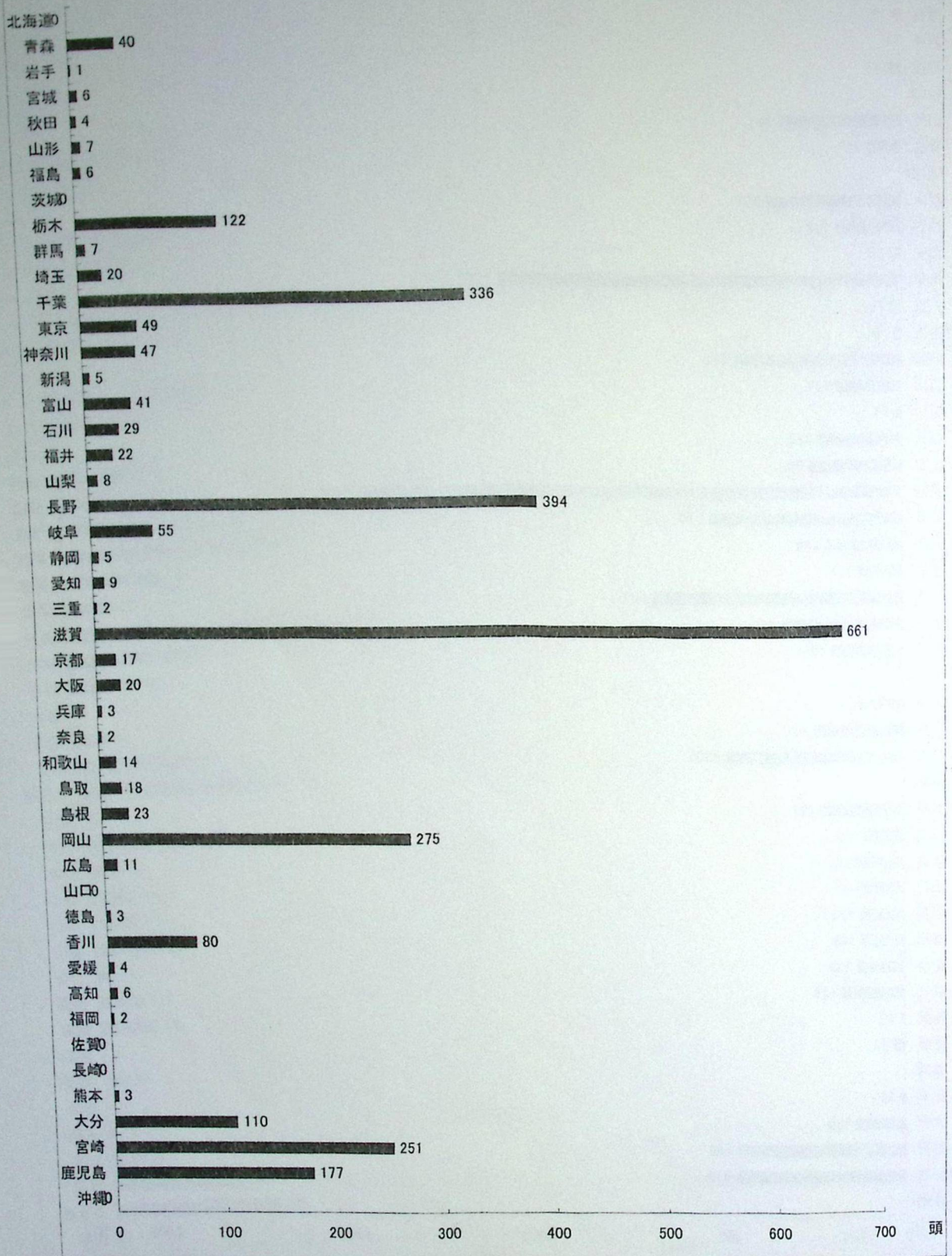


表-12 飼養目的によるニホンザル
捕獲頭数(1962~1988)

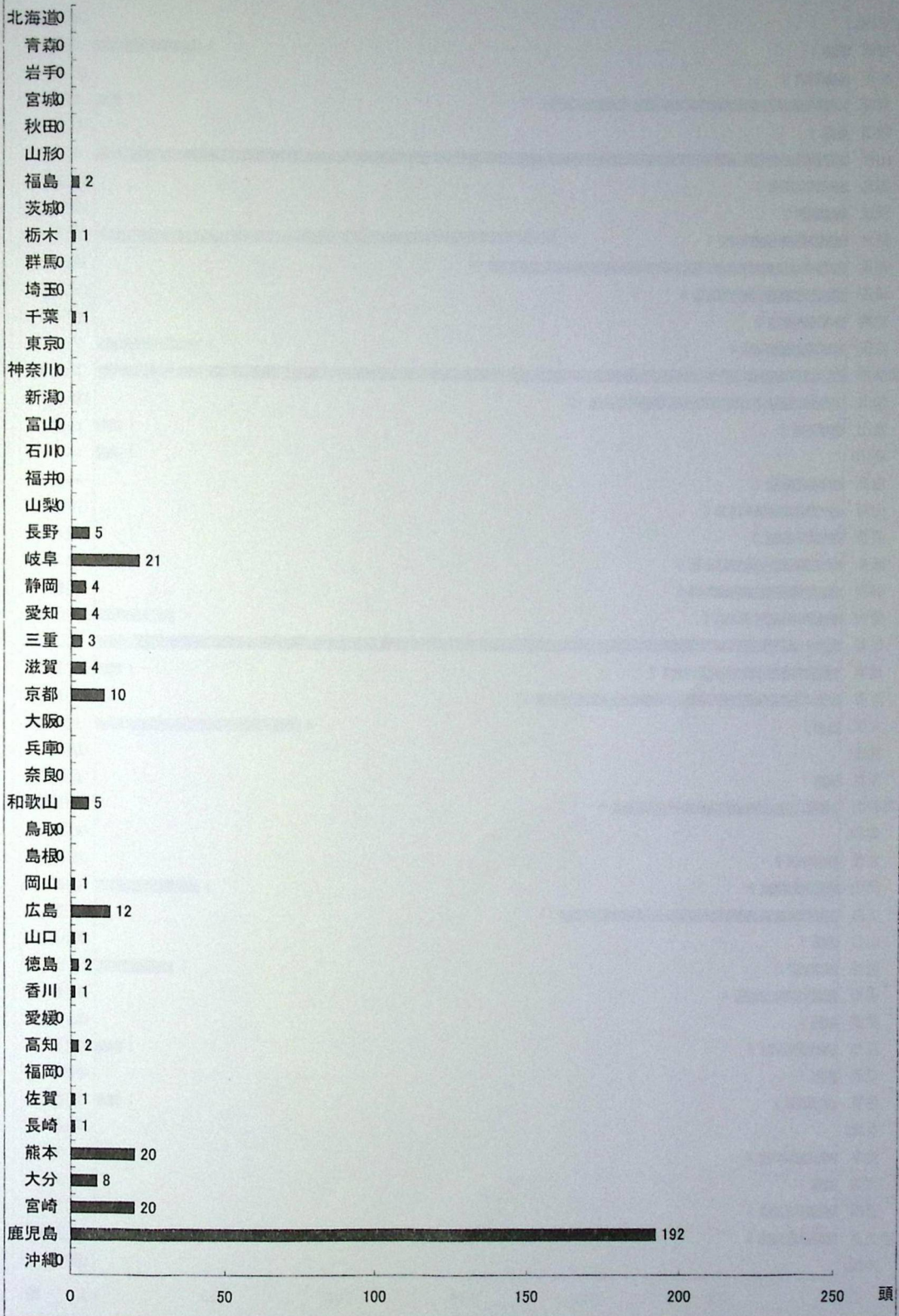


表-13 傷病鳥獣保護によるニホンザル捕獲頭数(1981~2000)

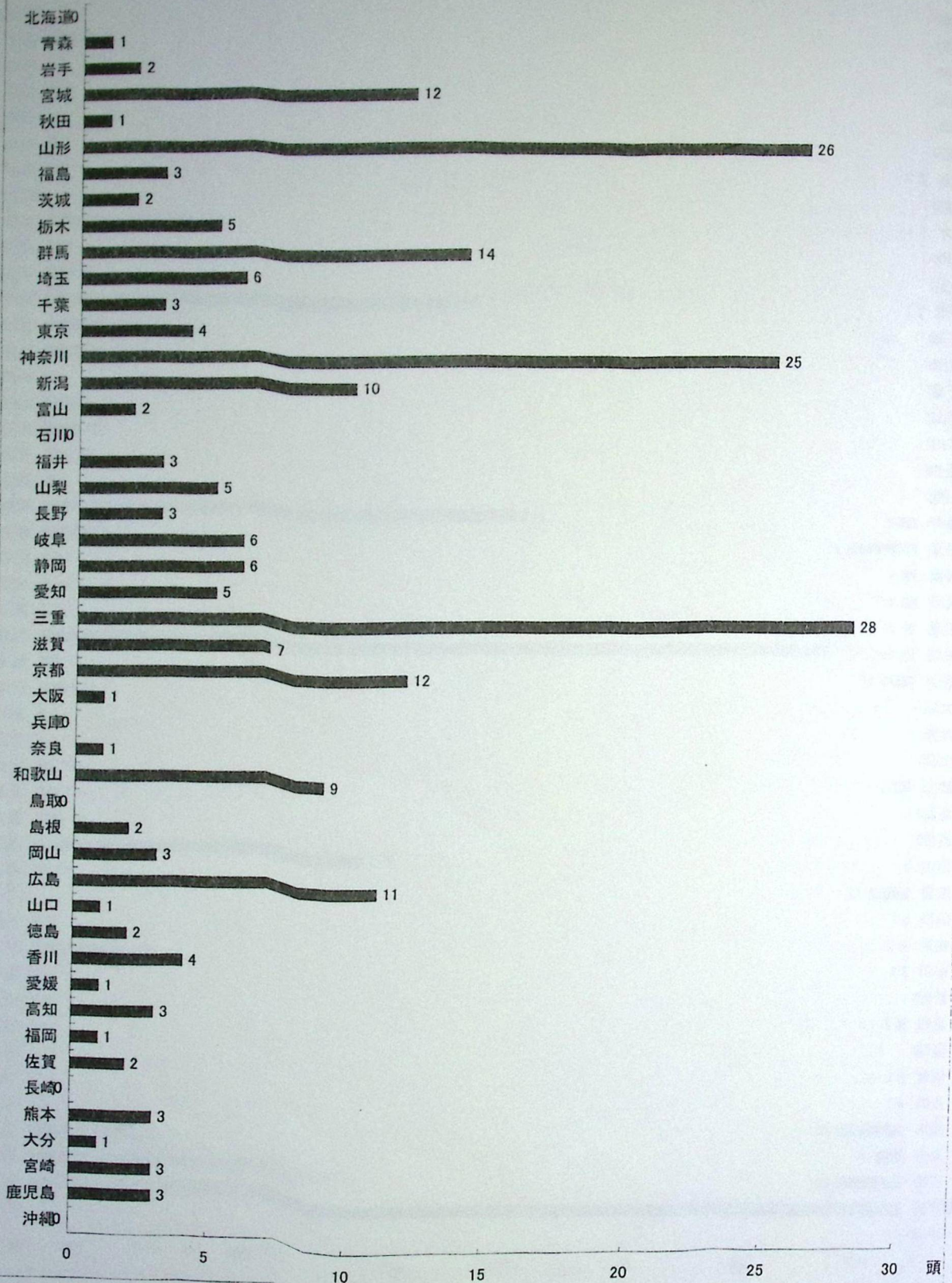
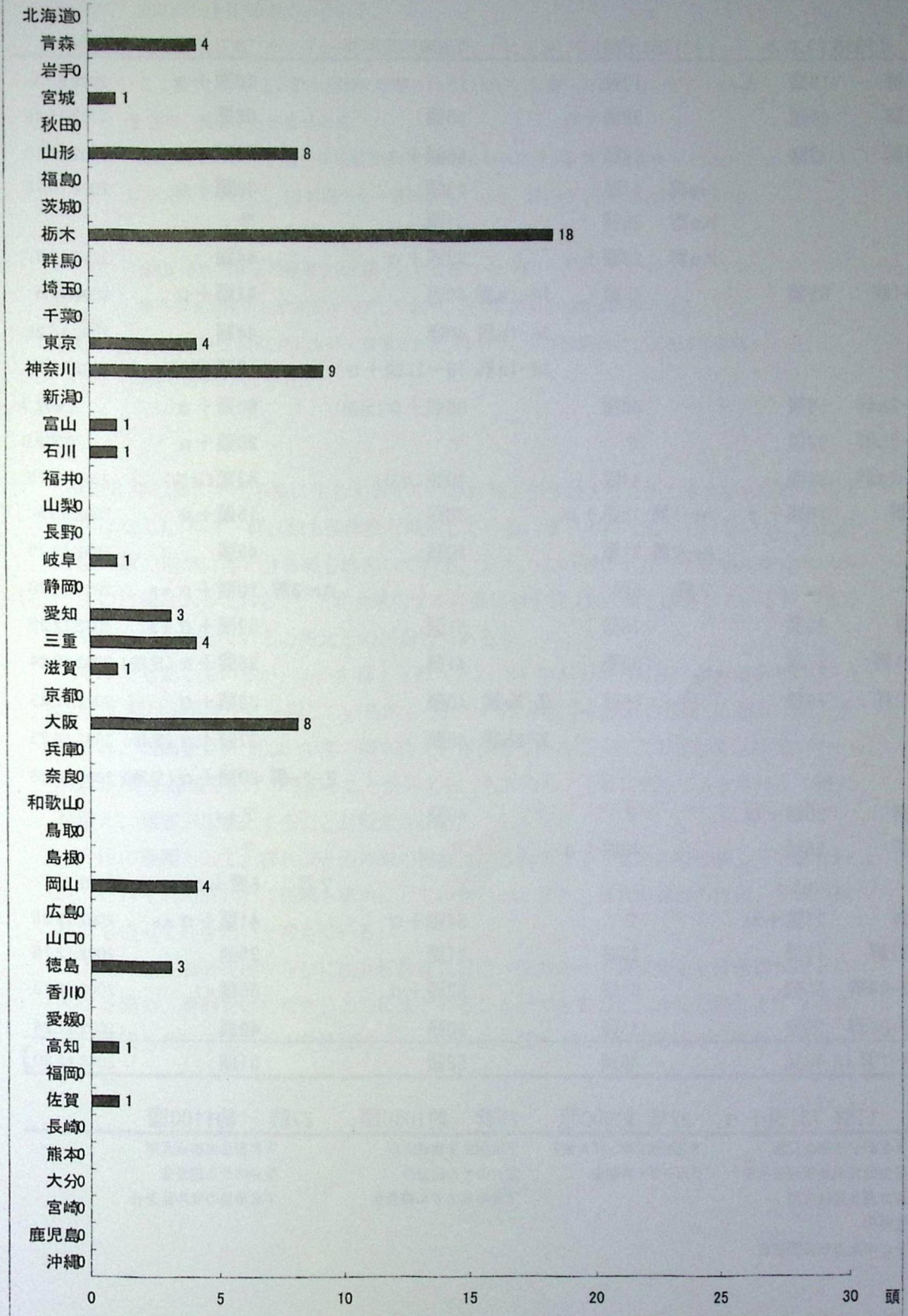


表-14 職務上必要な理由によるニホンザル
捕獲頭数(1981~2000)



下北のサル、群れ数と個体数の変遷 (2002年12月末現在)

植月純也

松岡史朗

《1998.12.31》		《1999.12.31》		《2001.12.31》		《2002.12.31》	
I-1群	13頭		13頭		?	10頭 + α	2002.2.13
I-2群	46頭		38頭 + α		65頭	68頭	2002.11.19
I-3群	73頭		79頭 + α		55頭 + α	63頭 + α *1	2002.10.10
		I-s群	43頭		43頭	36頭 + α	2002.10.12
		Ka群	28頭		31頭	?	
		Ko群	28頭 + α		35頭 + α	44頭	2002.11.8
M-1群	82頭		46頭	M-1a群	40頭	41頭 + α	2002.11.8
				M-1b群	40頭	44頭	2002.10.28
				M-1c群	19~22頭 + α	48頭(足跡)	2002.12.25
M-2a群	58頭		66頭		60頭 + α (足跡)	60頭 + α	2002.7
M-2b群	27頭		?		?	30頭 + α	2002.8
M-2c群	31頭		44頭		40頭(足跡)	43頭(足跡)	2002.12.25
Ar群	33頭 + α	Ar-1群	18頭 + α		38頭	15頭 + α	2002.8.15
		Ar-2群	31頭		20頭	49頭	2002.12.25
		?群	6頭			Ar-3群 20頭 + α *2	2001.11.20
Y群	43頭		13頭		61頭	52頭 + α *3	2002.12.23
Z-1群	27頭		33頭		41頭	26頭 + α (足跡)	2002.12.24
Z-2群	78頭		66頭	Z-2a群	40頭	38頭 + α	2002.12.25
				Z-2b群	49頭	37頭 + α (足跡)	2002.12.23
						Z-2c群 20頭 + α (足跡)	2002.12.28
U群	30頭 + α		?		48頭	? *4	
B群	56頭		40頭 + α		?	?	
						?群 6頭 + α *5	2002.3.31
O群	21頭 + α		?		54頭 + α	41頭 + α *6	2002.12.26
A87群	19頭		20頭		21頭	25頭	2002.12.16
A2-84群	60頭		61頭		82頭 + α	89頭 *7	2002.12.13
A2-85群	35頭		35頭		50頭	49頭	2002.12.24
【A-1群 *8	48頭		46頭		52頭	51頭	2002.12.30】
17群 732頭 + α		22群 約900頭		25群 約1050頭		27群 約1100頭	
下北野生生物研究所 野生動物保護管理事務所 京大霊長類研究所 佐井村 下北半島のサル調査会		下北野生ニホンサル研 グループ一斉調査		下北野生生物研究所 佐井のサル調査会 下北半島のサル調査会		下北野生生物研究所 佐井のサル調査会 下北半島のサル調査会	

- * 1 すでに群れが分裂している可能性がある。(植月)
- * 2 2001年11月20日のカウント。
- * 3 2002年夏以降、サブグループが頻繁、すでに分裂しているかもしれない。
- * 4 ここ数年、U群とB群が同時に観察されていない。U群・B群、そしてZ-2b群を含め、精査する必要がある。
- * 5 2000年ごろより、男川中流域(松山沢・滑川)から源流部、さらに海峡ラインの入切山周辺にかけて、10数頭のサル情報を得ている。群れのでどころは不明だがオトナメスや子ザルの確認もあり、不明群とした。
- * 6 2002年8月8日の観察で49頭+ α を確認している。
- * 7 冬季調査期間中もサブグループしており、近々に群れの分裂が予測される。
- * 8 1981年から1982年にかけて捕獲されたA1群で、現在駒野沢村七引地区の野猿公苑で飼育されている。

1998年以降、下北半島に生息するサルの群れ数と個体数をまとめてきたが(2000年のデータはなし)、年々、群れ数も個体数も増加している。まとめには記していないが、群れ数と個体数の増加に伴い分布域も拡大している。また、この報告にはハナレザルやオスグループの情報は入っておらず、下北全域のサルの個体数を約1100頭と推測しているが、1200頭ぐらいは生息していると考えるのが妥当であろう。

*印でも記しているが、I-3群・Y群・A2-84群が分裂の可能性が大であり、(I-3群とY群はもうすでに分裂しているかもしれない)今年度中に群れの数は30群になると推測され、当調査会が2000年度の報告書でも指摘しているように、下北半島全域(頭部むつ市以西)に生息域を広げつつあることが伺える。もちろん、それに伴って人とサルとの接点も増え、猿害が広域化することが懸念される。

今後の課題として、群れ数と個体数の推移は、これまで通りまとめを継続していきたいが、それぞれの群れの行動域も明かにしていきたい。また、現状の群れの由来、分裂の推移にも迫っていききたいと考えている。

下北野生生物研究所ならびに佐井村教育委員会・佐井のサル調査会から情報提供など多大なる協力、賛同をいただき、ここにまとめることができました。お礼を申し上げますと共に、今後も共に下北のサルを見続け、人とサルとの関わりについて考えていきたいと思っている。

下北半島のサル

2002年度(平成14年度) 調査報告書

発 行 者 下北半島のサル調査会

発 行 日 2003年6月15日

編集・印刷 松岡史朗・三戸幸久

☎039-5311

青森県下北郡脇野沢村桂沢90-1

TEL・Fax 0175(44)2620